資料編2：

主要な公共ホール・劇場におけるボランティア活動の実態

ー館側及びボランティア従事者へのインタビューー調査結果ー

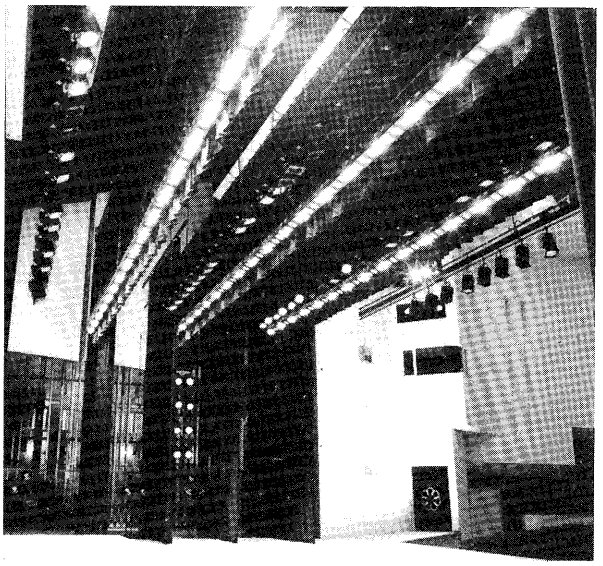
Ⅰ．喜多方プラザ文化センター……資2- 1
Ⅱ．中島町文化センター・能登演劇堂……資2-13
Ⅲ．武生市文化センター／武生国際音楽祭……資2-23
Ⅳ．いまだて芸術館……資2-35
Ⅴ．大阪府立青少年会館／プラネット・ステーション……資2-43
Ⅵ．たんば田園交響ホール……資2-53
Ⅶ．春日市ふれあい文化センター……資2-65

Ⅰ．喜多方プラザ文化センター

公共ホール・劇場の舞台・音響・照明など「うらかた」に特化したボランティアとして全国的にも早い時期に導入され、1983 年以来 10 年以上の活動歴がある。「日本舞台研究者連絡会」事務局。「うらかた」以外にも市民による複数の企画・鑑賞団体が組織されている。

施設・運営の概要

運営母体	喜多方地方広域市町村圏組合
所在地	福島県喜多方市字押切川向 5364-1
TEL	0241-24-4611
FAX	0241-24-4611
開館年月	1983 年 11 月
複合形態	複合施設
施設特性	音楽ホール
座席数	大ホール 1176 席、小ホール 400 席
自主事業予算	年間 2,500 万～3,600 万円
自主事業数	年間 20 本（平成 6 年度）
立地都市人口	37,227 人
組織体制	8 名(プラザ運営専任スタッフ 4 名、兼務者 4 名の計 8 名が通常の運営スタッフ。中央公民館を併設しており、自主事業等の大きな催しは公民館専任職員を含む 14 名で対応する。)



ボランティア制度の概要

名　称	•舞台研究会「うらかた」
導入時期	•1983年7月
登録人数	•約40名（うち女性5名。年齢層は30～40代、三分の一は設立当初からのメンバー)
導入の経緯	•もともとは、裏方の技術スタッフがいなかったことがきっかけ。舞台芸術に関する技術の研修を行い、技術協力を積極的に行って、喜多方地方広域市町村圏内における文化活動発展に寄与することを目的に設立された。
活動内容	•舞台・音響・照明等
募集方法	•公募、口コミ
研修	•喜多方プラザの技術職員による研修、他ホール等への研修旅行など
実費支給	•あり。半日、昼間、全日 各5,000円、7,000円、10,000円。報酬の５％は舞台研究会「うらかた」の事務局に戻入。
その他	•「うらかた」が実際にオペレーションを行うのは地元の出演者による催しがほとんど。プロの公演の時には通常主催者側でオペレーターを連れてくる。 •年間の公演回数は50～60回。各回ごとに仕込み、リハーサル、本番や打ち合わせがある。

■ 喜多方プラザ文化センター

施設側インタビュー記録

1. ボランティア制度導入の経緯

(1) 開館準備からボランティア導入まで

- 施設の開館は1983年11月1日で、その約3ヶ月前の7月29日にボランティアの設立総会を開催した。
- 施設建設中の1983年4月にセンターの準備室ができ、当時の企画担当者が建設中の施設を見て、それまで喜多方にあった厚生会館（集会場的な施設）と違って、本格的な技術スタッフがいないと対応できないと考えていた。
- そこで当時、東京で PA などの音響オペレーション関係の仕事をしていた現在の音響担当のスタッフ（喜多方出身）を迎えることとした（4/25日付け）。その後、現在の舞台担当のスタッフが8月1日に、照明担当のスタッフが10月1日に加わった。
- 4月末に、オープニング事業として決まっていた新日本フィルの演奏会とNHK のど自慢を実施するためには、ホール側としてどのような技術スタッフが必要か調査した結果、照明、音響、舞台の3名の技術スタッフだけでは対応できないことが判明した。
- そこで、不足スタッフを補うという観点と、劇場の技術スタッフの仕事に興味のある人をネットワークしようということで、4月の市の広報紙に募集を掲載した。
- 行政的には経費の節減というねらいもあったが、むしろ地元の催しには地元の人間で対応したいという考えもあった。

(2) ボランティアの募集と研修

- 市の広報紙だけではなかなか集まらなかったが、工業高校の先生が教え子を集めるなど、口コミで30名がとりあえず集まった。
- その後5月末に企画調整課長の召集により関係者が集められ、何度か会合を重ねて11月3日のオープニングセレモニーの運営はすべてアマチュアの手で、役所っぽくならないように行おうという方針が固まった。
- 「うらかた」という名称もボランティアのメンバーが考え出したもの。
- 8月に入ってメンバーは研修会を開いたり、舞台公演のビデオを見たり、工事中の現場視察などを行って準備を始めた。センターの舞台担当者と照明担当者は、中野サンプラザホールで行われる一ヶ月間の技術研修に参加。
- 10月になってからは、毎週2回夜にメンバーが集まり、購入した備品類の梱包を解いたりする作業も行った。備品購入に際しても、メンバーに様々な職業の人がいたため、ほとんどその関係で調達することができた。このように開館前から関わることで、ボランティアメンバーには、自分たちの劇場だという思い入れも大きい。
- 建物の引き渡しと同時にボランティアの仲間のバンドをよんで、コーラス

も交え、一通りのシミュレーションを行ったりした。

- 研修は、基本的にセンター内で行ったが、オープンの数日前にはオープニングセレモニーのリハーサルも兼ねて、プレス関係者へのレビューを実施した。

2. ボランティア制度の内容

(1) メンバー構成等

- 現在のメンバーは約40名で、そのうち5人が女性。現在の年齢は35～40才ぐらい。3分の1から半分程度は設立当初からのメンバー。
- 設立後10年以上を経過しているが、新人は毎年2～3名程度。市の広報紙による公募も行っているが、ほとんどは口コミ。入会してもしばらくすると出てこなくなるような人もいる。
- 参加の動機としては、それまでバンドや演劇をやっていた人や電気関係に興味があった人などもいた反面、まったくの素人もいた。応募に際しては一応「成人」という枠だけ設けた。
- 組織的には、一応「舞台部会」、「照明部会」、「音響部会」に分かれており、それぞれ部長が１名いる。
- 居住地はほとんどが喜多方市内だが、車で40～50分程度かかる人もいる。施設の運営主体が喜多方広域市町村圏組合（1市3町3村）であることもあり、特に居住地の制限は設けていない。

(2) ボランティアの業務内容

- 「うらかた」のメンバーが実際にオペレーションを行うのは、地元の出演者による催し物がほとんど。プロの公演の時には主催者がオペレータを連れてくるケースが多い。
- 「JIMOTO PLAZA」という催しも地元のオペラや演劇を長期的に援助する企画で、「うらかた」のメンバーが手伝っている。
- 「うらかた」の仕事は、基本的にこうした地元団体の出演するセンターの自主事業の舞台・音響・照明のオペレーションであるが、人手が足りないときは、オモテの業務を手伝うこともある。
- 最近では、「うらかた」の存在が知られるようになって、他のホールや野外イベントのお手伝いをすることもあるようだ。
- 伊達町のふるさと会館にも同様のボランティア組織があるが、その担当職員の研修やメンバーとの合同研修は喜多方プラザで行われた。
- 年間の公演回数は50～60回。一番一般的なケースでは、金曜の夜仕込みを行い、土曜日リハーサル、日曜日本番ということで、打ち合わせ等も含めると、ボランティアの活動日数としては公演回数の3倍ぐらいになるだろう。１回あたりのボランティアの数は１名の時もあれば、多いときは10名になるケースもある。
- 現在広域市町村圏でNLCフェスティバル（NLCはNew, Life, Circleの頭文字）というのを実施している。これは地元アマチュア団体によるフェステ

■ 喜多方プラザ文化センター

● 平成８年度舞台研究会「うらかた」年間活動予定表

月　日	活　動　計　画	備　考
５・２５～２６	珠　美　会	２０人
６・　２０	ザ・蔵シック　（プラザ自主事業）	５人
６・２２～２３	劇　団　雄　国　　峠	２０人
７・５～７	福井県福野町　研修会	１０人
７・１２～１４	大正琴発表会	２０人
８・１～３	いわさきちひろ展仕込み	２０人
９・１５～１６	あやめ舞踊会	２０人
９・２２	劇団　四季	２０人
１０・５～６	舞踊　美喜和会	２０人
１０・１２～１３	民謡と仕舞	２０人
１０・１９～２０	ジャズダンス発表会	２０人
１１・　２～３	あいづ現代舞踊団	２０人
１１・　９～１０	民謡民舞の祭典	２０人
11・30～12・1	題名のない発表会	２０人
１１・７～８	ロックデイー	１０人
９・１月～２月	ＪＩＭＯＴＯ　ＰＬＡＺＡ	２０人
９・１月～３月	ＮＬＣフェスティバル（演劇、音楽、美術等の発表）	２０人
年　間	結婚式、ダンスパーティー、研修会等	人
合　計		

ィバルで、企画を一般公募し自主企画・自主運営によって開催するもの。「うらかた」のメンバーは企画段階から参加し、相談相手になっている。

- 企画ということでは、一時期、うらかた映画祭というのを企画して実施したこともあるが、最近はやっていない。その代わりになるものとしては、NLC フェスティバルに企画から参加している。

(3) ボランティアの運営

- 喜多方プラザと「舞台研究会うらかた」は委託契約を交わしている。
- 館側で負担している費用は保険の掛け金分の補助（24万円／年）のみ。保険は20人以下、年間20回以内の業務が対象範囲になっている。
- 10年前には、こうしたボランティアを対象とした保険がなかったので、民間の保険会社に相談して商品を作ってもらった。
- ボランティアには報償費を払っているが、それは主催者の負担で、プラザ

● 舞台研究会「うらかた」規約（抜粋）

（名称と事務局）
第一条　本会は舞台研究会「うらかた」と称し、事務局を喜多方プラザ内におく。
（目的）
第二条　本会は舞台芸術に関する技術の研修を行い、喜多方プラザ等における公演に伴う技術協力を積極的にはかることによって、喜多方地方広域市町村圏内における文化活動発展に寄与することを目的とする。
（事業）
第三条　本会は前条の目的を達成するため、次の事業をおこなう。
一　舞台芸術一般に関する研修会。
二　喜多方プラザの舞台機構の技術研修会
三　喜多方プラザの公演に対する技術要員の派遣に関すること。
四　その他本会目的達成に必要な事項。

－以下省略－

は施設使用料に含めて請求している。報償費は半日5,000円、昼間7,000円、9:00～22:00で10,000円。当初はもう少し低い水準だったが、伊達町のふるさと会館の水準にあわせて最近引き上げた。交通費はその中に含まれているという考え方で、別途支給はしていない。

- ボランティア組織の定例的な会議としては、毎月役員会と定例会を１回ずつ開いている。
- 当日のメンバー手配については、基本的に各部の部長からの連絡で行われる。
- 講習会では、最初に禁止事項を教えるようにしている。
- 会の主催で、照明機器メーカーの新商品の説明会への参加や新しいホールの見学、TBS の緑山スタジオ、金井大道具の見学といった研修会や懇親会も実施している。
- 「うらかた」のメンバーは、職員と同様いつでも出入りできるし、機材についても、職員や外部のプロと同様に自由に使ってもいいことになっている。

3. 自主事業の運営方法とその他の市民組織

(1) 自主事業の運営方法

- 喜多方プラザは広域市町村圏組合が運営主体になっていることも柔軟な運営ができる要因。運営スタッフは7名で技術職の3名はこれまで異動がない。また市からの派遣職員も一度広域市町村圏組合に出向してからプラザの運営スタッフとなっている。
- 従って、予算などについても喜多方市の決裁をいちいち仰ぐ必要がなく、館長に一任されている。教育委員会とも切り離されている点も柔軟な運営には有利。
- 自主事業のしくみも、28人の審議員からなる「喜多方プラザ自主文化事業

推進協議会」という任意団体が主催する形をとっており、喜多方プラザはこの団体に事業費を補助金として支出しているだけ。従って、入場料収入が予想を上回り、その予算を繰り越しても、また逆に赤字になっても、喜多方プラザには直接関係ないしくみになっている。

(2) Concert Planner あぐだもぐだ

- ニューミュージック系のコンサートを企画・運営する市民団体。多いときは年間4～5回のコンサートを企画・運営している。
- 公民館で青年教室のひとつとして講演会などの制作をしていた市民グループが、プラザができたときに自分たちの好きなコンサートがやりたいということで設立された。メンバーは20～30人で、機材の搬出入からチケットの一般売りまでやっている。
- オープニングで南こうせつを呼んだことがきっかけで、その後南こうせつのコンサートは10年間で5回開催している。
- 基本的にはボランティアサークルであるが、喜多方市の規模であれば民間のイベント会社は成立しにくいのも事実。

(3) きたかた音を楽しむ会

- 喜多方プラザの最初の自主事業は、ピアノの先生を中心にした実行委員会形式で行った。チケットの販売手数料を実行委員会に還元したところ、予想以上に客が入り、その手数料収入が残ったことから、継続してクラシック音楽のコンサートを企画することとなった。
- 「ザ・蔵シック」という室内楽のコンサートを年1～2回開催している。
- 開館時の新日本フィルの演奏会が縁になって、“室内楽の楽しみ”という演奏会を開催していたこともあり、出演者は新日フィルのメンバーが多い。
- 現在70名が登録。プラザのクラシックコンサートの自主事業にも、チケットの販売や当日運営など様々な形で協力している。

(4) 喜多方演劇鑑賞会

- 全国的に見て、一番小さな都市にある演劇鑑賞会。
- いわゆる労演の活動は会津若松に吸収されていたが、会津若松で2回公演していたものをプラザができた時に1回喜多方に持ってきたらどうだろうかという話がきっかけになって、会津若松から分派・独立してこの演劇鑑賞会になった。
- 現在会員は約700名、隔月で演劇公演を開催している。喜多方の世帯数は現在約1万、自主事業として演劇をやることは観客層を考えると難しい。1万世帯の中の700名ということで、演劇に興味のある人はほとんど加入しているような感じである。

(5) 喜多方こども劇場

- いわゆる「こども劇場」の喜多方組織。全国ベースでは組織率が下がっているらしいが、喜多方では増加傾向にあり、現在の会員数は約1,000人。
- 年間6回程度の公演を実施。

(6) 劇団「風の子」との関係

- 3年前から劇団「風の子」の東北班（3名）とある種のフランチャイズ契約を結んでいる。営業の窓口は会津若松に置いているが、この劇団の制作現場は喜多方プラザに置き、リハーサル室は自由に使えるようになっている。
- 喜多方制作の一作目「たぬきはつらいよ」は3年の間に児童対象の演劇公演では国内劇団中最大公演数を記録し、現在は2作目「かえるの一歩」で全国を公演中。
- 広域で公演活動を行うため、喜多方プラザの宣伝媒体にもなるし、劇団のメンバーは「うらかた」にも登録している。
- 自主事業の広報対象エリアも最近は広げている。積雪の多い冬でも通れるトンネルの開通によって山形県米沢からも40分になった。近頃では100km圏内から観客が来るようになっている。

4. 現在の課題と今後の方向性

- 新人があまり入ってこない。メンバーは40名いるが、実際のボランティア活動に出る人と出ない人が偏って、その結果メンバーの技術水準にも差がついてしまった。
- プロなのかアマなのか意識が必ずしも明確ではないが、報償費をもらっているということもあり、主催者からはプロとして見られる。
- 事務所に職員じゃない市民がいる、ということは、市民にとって喜多方プラザを親しみのある存在にし、館と市民の間のクッション役としても機能している。メンバーの中には、アマチュアの文化団体に所属している人もおり、「うらかた」が市民をプラザの運営に巻き込む原動力になっている。

―以上―

■ *喜多方プラザ文化センター*

● 参考：日本舞台研究者連絡会名簿

	会館名及び団体名	所在地	電話番号
青森	十和田市民文化センター 十和田ステージクリエイト	〒034 青森県十和田市西三番2-1	(0176)22-5200
岩手	遠野市民センター 舞台技術集団ステージスタッフとおの	〒028-05 岩手県遠野市新町1-10	(01986)2-4411
	胆沢町文化創造センター ＩＢＵ（イブ）	〒023-04 岩手県胆沢郡胆沢町南都田字加賀谷地1-1	(0197)46-2133
福島	伊達町ふるさと会館 ＭＤＤスタッフ	〒960-04 福島県伊達郡伊達町字前川原63	(0245)83-3244
	喜多方プラザ文化センター 舞台研究会うらかた	〒966 福島県喜多方市押切川向5364-1	(0241)24-4611
	會津風雅堂 ふうがくらぶ	〒965 福島県会津若松市城東町12-1	(0242)27-0900
山梨	増穂町文化会館	〒400-05 山梨県南巨摩郡増穂町天神中条820-1	(0556)22-8811
新潟	小出郷文化会館	〒946 新潟県北魚沼郡小出町大字千昼溝1848-1	
	コミュニティーホールさわらび さわらび操作師会	〒949-23 新潟県南魚沼郡大和町大字浦佐5175-1	(0257)77-4671
	六日町文化会館 六日町文化会館技術スタッフ	〒949-66 新潟県南魚沼郡六日町大字六日町865	(0257)73-5500
富山	小杉町文化ホール　ラポール ラポール　ステージクルー	〒939-03 富山県射水郡小杉町戸破1500	(0766)56-1515
	福野文化創造センター ヘリオス　ステージクルー	〒939-15 富山県東砺波郡福野町やかた100	(0763)22-1125
石川	能登演劇堂	〒929-22 石川県鹿島郡中島町中島甲部130	
福井	いまだて芸術館 Ａ．Ｅ．スタッフ	〒915-02 福井県今立郡今立町粟田部11-1-1	(0778)42-2700
	越前陶芸村文化交流会館	〒916-02 福井県丹生郡宮崎村小曽原7-8	(0778)32-3200
	南条文化会館	〒919-02 福井県南条郡南条町牧谷29-15-1	(0778)47-3810
岐阜	郡上八幡総合文化センター サクラプロダクション	〒501-42 岐阜県郡上郡八幡町島谷207-1	(05756)7-1555
奈良	新庄町文化会館 マルベリーホール　ステージオペレータークラブ	〒639-21 奈良県北葛城郡新庄町大字南藤井70-1	(0745)69-4600
大阪	浄るりシアター Ｊ．スタッフ夢舞（ムーブ）	〒563-03 大阪府豊能郡能勢町宿野30	(0727)34-3241
兵庫	淡路アソンブレホール ＡＣＴ（アソンブレ・クリエイティブ・チーム）	〒656-24 兵庫県津名郡淡路町岩屋2942-17	(0799)72-5321
	出石町文化会館 ひぼこホールスタッフクラブ	〒668-02 兵庫県出石郡出石町水上318	(0796)52-6222
	稲美町文化会館　コスモホール コスモオペレータークラブ	〒675-11 兵庫県加古郡稲美町国安1286-1	(0794)92-7700
	山南やまなみホール 山南ステージスタッフ	〒669-31 兵庫県氷上郡山南町谷川1110	(0795)77-3290
	たんば田園交響ホール たんば田園交響ホールステージオペレータークラブ	〒669-23 兵庫県多紀郡篠山町北新町41	(0795)52-3600
	四季の森会館 四季の森アートプロモーション	〒669-22 兵庫県多紀郡丹南町網掛429	(0795)94-1174
	おおやホール おおやホール　オペレータースタッフクラブ	〒667-03 兵庫県養父郡大屋町山路7	(0796)69-0488
	関宮町中央公民館 ノビアホール　ステージオペレータークラブ	〒667-03 兵庫県養父郡関宮町関宮637	(0796)67-3266
	ビバホール ビバホール　ステージオペレータークラブ	〒667-01 兵庫県養父郡養父町広谷250	(0796)64-2028
	太子町立文化会館 あすかホールサポート倶楽部	〒671-15 兵庫県揖保郡太子町鵤1310-1	(0792)76-2111
	東条コスミックホール コスミックホール　オペレータークラブ	〒673-13 兵庫県加東郡東条町天神66	(0795)47-1500
	中町文化会館 ベルディホールボランティアオペレータークラブ	〒679-11 兵庫県多可郡中町中村町135	(0795)32-1300
	山崎文化会館　サンホールやまさき ＨＳＳ（ホールサポートスタッフ）	〒671-25 兵庫県宍粟郡山崎町奥沢88-1	(0790)62-5300
	和田山町文化会館 ジュピターホールスタッフクラブ	〒669-52 兵庫県朝来郡和田山町玉置877-1	(0796)72-1000

☺ ボランティア・インタビュー記録 ☺

Ａさん（ボランティア監査、創設以来のメンバー）
Ｂさん（婦人服会社勤務）
Ｃさん（ボランティア副会長、舞台担当、創設以来のメンバー、弱電会社勤務）
Ｄさん（ボランティア事務局長、照明担当、郵便局勤務）
Ｅさん（ボランティア副会長、損保会社勤務、メンバー８年目）
Ｆさん（ボランティア会長、三代目・三期目、自営業、準備段階から参加）
Ｇさん（喜多方プラザ職員）
Ｈさん（喜多方プラザ職員、小ホール担当）

１．参加の動機・きっかけ

Ａさん｜青年会や労音は「うらかた」参加当時からやっていた。青年会では照明、労音では音響の補助をしていて、自分でもＰＡを購入したりしていた。「うらかた」には当時の喜多方プラザ準備室長から誘われた。

- 「うらかた」は基本的には音響・照明などの部門別に活動しているが、人数が限られてきたこともあって、最近はオールマイティな人が求められている。

Ｂさん｜喜多方音楽協議会でバンド活動を行っており、そこのロックデーという催しで喜多方プラザを使っていた。Ａ氏の紹介で「うらかた」に入会。現在は音響中心の活動をしているが、ＰＡの使い方や操作方法を収得できる点に興味を持った。

Ｃさん｜現在のボランティア会長と一緒に町の青年会で演劇をやっていた。当時の喜多方プラザ準備室長から誘われて入会。

Ｄさん｜開館後２年ほど経てからコンサートなどの公演を鑑賞に行くようになり、照明の操作などに興味を持って「うらかた」に参加した。

Ｅさん｜西会津町でアマチュア・バンドの音響を担当していたが、技術的なレベルとしては専門的なものではなかった。友人が「うらかた」をやっていて勧誘された。喜多方市の住民ではないため、ここで得たものを将来的には地元に還元し、人づくりをしたい。

活動の頻度

- 頻繁に活動している人は全体の３割から四分の一程度。
- プラザで結婚式もやっていた時は年間50組程度をこなしていた。活動としては大変だったが、コンサートや芝居よりも高度な技術を要求されないので、初歩的な技術を習得する良い機会だったとも言える。現在では市内の各地に結婚式場ができたこともあり、結婚式の対応はしていない。
- 「うらかた」メンバー同士でこれまで３組ほど結婚した。結婚すると特に奥さんはなかなかそれまでと同じようには活動できなくなる。
- 市の文化祭行事が始まると毎週の活動になる。８月は比較的少ない。

２．満足度

Ｃさん｜「ご苦労さまでした。」という声がうれしい。

Eさん｜実際に裏方の活動をしてみて、観客や出演者が喜んでくれることに満足感を感じる。このような活動を継続していくことで、地域住民のレベル向上に繋がればと思う。日本は地方から変わるべきだ。

- 生活するために収入を得るのが仕事だと思っている。それ以外に何らかの形で社会貢献をする部分は必要。

Fさん｜「うらかた」の会長としては、メンバーの減少と高齢化が気になっている。若い人の層が参加してくれないと、将来に対する不安がある。たんば田園交響ホールのように、定期的に開講する技術研修講座などがあれば若い人も入って来るかもしれない。創設当初は喜多方の“青年”だった「うらかた」メンバーが、今では社会的にも“働き盛り”といわれる年齢になり本来の仕事でも一番忙しい時期で、なかなか「うからた」の活動ばかりに関わっているわけにも行かない。また年齢を経て、第一線を退く時期が来れば再び活発に活動できるかもしれないが･･･。

Eさん｜ボランティアをやっていることに対する職場の反応もまちまち。

Cさん｜会社に対しては「うらかた」の活動を特に隠していることはない。他に町の消防団などにも参加している。

Bさん｜ボランティアという認識よりもアルバイトをしていると思われる場合もある。逆に公演チケットを頼まれることもある。

＊「うらかた」の存在はプラザの広報にはなっていると思う。興味のある公演の情報が入っても、実際にチケットを買いに行く行動に出るのはそこに人がいるから。最初のオープニングセレモニーの際には、通常以上に時間を割いてもらう必要があったので、メンバーの勤務先に市長名でその旨連絡を入れてもらった。自営業の人は「うらかた」のための時間を自分自身でやりくりしなければならないため、難しい部分もある。

報酬について

- 「うらかた」の活動は基本的に、やりたいからやる、というスタンス。
- 但し、活動内容は専門的であり、公演内容によっては要求されるレベルも高度になる。一度高度な技術を披露すると、結婚式をする人でも制作会社でも要求が高くなる。
- 多少の報酬がでると、それだけ責任感を感じる部分も否定できない。
- 研修旅行に行ったり、裏方に関する専門誌を購入したりすると結局「うらかた」の活動のために使ってしまう。但し、研修には補助も出る。
- 報酬のうち５％は「うらかた」に戻入する。

プラザの波及効果について

- 喜多方プラザができてから、街自体は活性化されていると思う。波及効果はある。人の流れも変わり、近隣の市町村だけでなく、山形県などからも喜多方に人が来るようになった。
- 一方で、喜多方プラザは広域の建物であるが、広域の住民全体がプラザを自分の施設と思うまでには浸透していないと思う。
- アマチュアで芸術活動をしている人たちにとって、発表する機会が増えた。公共ホールは本来住民が使うものだと思う。

「うらかたの」の技術について

- 裏方技術を向上させるための研修として、定期的なプログラムを組んでいる。照明操作の有資格者もいる。専門的な資格取得の費用は補助がでる。
- 技術については、喜多方プラザの担当者が一級舞台機構調整技能士の資格を持っている専門家としてだけでなく、ホールの運営まで幅広い知識を持っているので、彼の技術を伝授されている。日本ＰＡ技術者協議会の副理事長を務めていることもあって、全国のニュースもリアルタイムに入ってくる。プラザの担当者は市の職員でありながら専門性をもっていてなかなか代わりがいないので、異動がしにくい。公務員感覚ではない彼のようなスタッフが館側にいてくれることで、ボランティアは非常にラッキーだったと思う。

3．施設側に対する要望・課題など

- プラザの中では特に問題はない。
- プラザに新しく来た市の職員は、人間を作り変えられる。
- 他の自治体と比較すれば、館長にも理解があると思う。プラザのスタッフも決してお役所的に働いていない。「プラザは良いところだ」と皆言っている。異動して１週間もすれば普通の市役所のセクションとは雰囲気が違うことがわかる。出向すると出世コースからはずれるという認識が他の施設では聞かれるが、喜多方プラザは出世コース。
- 「うらかた」の三分の一は市役所の職員。プラザのスタッフから異動しても「うらかた」には戻ってくる。
- 若い人から年輩の人までさまざまな年齢や分野の人が、用事がなくてもプラザに来られるようでありたい。

4．今後の展望

Ｅさん｜喜多方は過疎地。喜多方広域にとどまらず、他の地方のホールにも「うらかた」として出向いて行きたい。他にも新しいホールを建てたがその施設を使いきれないという話も耳にする。広い意味で“広域”を考えたい。

Ａさん｜我々の活動を若い人に伝えて行ければと思う。この組織の雰囲気が実践的で、ある意味では昔風なのかもしれない。つまり、現場の経験で仕事を覚えていくタイプのものなので、覚えられない人は続けられなくなる。

Ｃさん｜若い新しい人を誘って来ても、実際の現場ではなかなか教えている余裕がないのも事実。本番などでは特に、知っている人がやるのが効率的になってしまうので、固定メンバーで用が足せてしまう。

Ｇさん｜わかっている人、呼吸の会う人のほうがやりやすいのは事実。

Ｅさん｜若い人の行動パターンも変わってきているのでは。

Ｇさん｜「うらかた」のような仕事に楽しみを見いだすまでには、ある程度の時間が必要。若い人は目に見えてすぐに楽しいことに行ってしまう。

－以上－

Ⅱ. 中島町文化センター・能登演劇堂

能登中島町は、仲代達矢氏の「無名塾」との密接な関係がきっかけとなって、能登演劇堂を設立。舞台芸術アカデミーという舞台技術講習受講者が、裏方のボランティアを務めているが、それ以上に自主事業の企画からチケット販売、運営までを手がける「能登演劇堂振興協会」という市民組織の存在が特徴的。ホールの運営そのものに深く踏み込んだ市民組織としてのボランティアの可能性を示唆している。

施設･運営の概要

運営母体	中島町・能登演劇堂振興協会
所在地	石川県鹿島郡中島町字中島甲部 130
TEL	0767-66-2323
FAX	0760-66-2326
開館年月	1995 年 5 月
複合形態	複合館（図書館、公民館と併設）
施設特性	演劇劇場
座席数	651
自主事業予算	年間 3,000～5,000 万円
自主事業数	年間 11 本 21 公演（平成八年度）
立地都市人口	8,541 人
組織体制	総務系:2、企画系:4、技術系:2／計 8 (全て自治体職員)

ボランティア制度の概要

名　称	•①：舞台芸術アカデミー（舞台の裏方業務に関する講座名、ボランティアとしての名称は特になし） •②：能登演劇堂振興協会（自主事業の実施・運営主体）
導入時期	•開館当初から（講座は開館前から実施）
登録人数	•①（アカデミー受講者）：15名（半数は町の職員）。 •②：協会委員約30名、役員12名。
導入の経緯	•①：施設オープン前から鹿島町と共同で「舞台芸術アカデミー」を開講。町民参加による劇場運営のため受講生のボランティアで裏方業務に対応。 •②：能登演劇堂の活用を促進し、企画面やチケット販売面で民間の知恵や力を借りるために設立。
活動内容	•①：照明・舞台・音響（現在3期目のアカデミーの受講と自主事業での研修・補助が主） •②：自主事業の演目の検討、広報・宣伝、チケット販売、友の会会員勧誘、協賛金集め等
募集方法	•①：公募。 •②：委員は町内の各種団体の代表者。
研修	•①：舞台芸術アカデミーの受講。
実費支給	•①：なし。＊もぎり会場整理は別に有償ボランティア（女性10名、時給1,000円）を導入
その他	•10年間中島町で稽古を続けてきた「無名塾」の活動の延長線上で劇場が設立された（仲代達矢氏が監修）。 •能登演劇振興協会が能登演劇堂友の会を設立し、演劇愛好家の拡充と入場者の安定を図るとともに、演劇を核としたまちづくりを推進している。

インタビュー記録

＊インタビューでは、劇場側の担当者と振興協会の会長にお話しをうかがった（舞台芸術アカデミーのボランティアメンバーへのインタビューは行っていない）。

1. 無名塾と能登演劇堂（振興協会会長の話を中心に）

(1) 無名塾との関わり

① きっかけ

- 無名塾の演出家の兄と知り合いだったこともあって、昭和56,7年頃から、自分の経営する町内の会社で塾生をアルバイトとして受け入れていた。
- 昭和59年12月に商工会の青年部の主催で「まちづくりシンポジウム」という催し物が開催されたが、話し合うことも大切だが行動を起こすことの方が大切だということを実感し、それがきっかけで自分が中島町のまちづくりに対して何ができるか考えるようになった。
- そんな折、塾生をアルバイトとして受け入れていたという経緯もあって、無名塾の公演を東京のパルコ劇場に見に来ないかと誘われ、芝居を見終わった後で制作スタッフに「中島町で合宿をしませんか」と持ちかけてみた。
- 当時、無名塾は箱根に合宿所を持っていたが、塾結成10周年に当たる年で、何か新しいことを始めたいと、前向きな感触を得ることができた。
- 昭和58年に仲代さんが能登を訪れたことがあり、その際にいい印象を持っていたことも幸いした。風土・気候がいいこと、文化的な香りがすること、住民の顔つきや表情が豊かなことなど、ここの土地や人に興味を持たれたようだ。
- 昭和60年の1月になって、合宿の話を前向きに進めるべく、行政への働きかけを行った。当時は、仲代達矢さんの名前は知っていても無名塾のことは知らない人が多く（議員の中には、無名塾を学習塾と思った人もいるぐらい）、反応は賛成・反対が半々ぐらいだった。
- 中島町以外の周辺の町にも話を持ちかけたところ、2～3の町も熱心で、是非自分の町で取り組みたいというような反応だった。

② 夏合宿

- その後、3月末までの間に、中島町内の意見調整を行い、7月に無名塾の合宿を行うことになった。
- 30人弱の塾生が民泊し、町の武道館を会場に夏合宿を行った。
- 当初合宿は非公開で、見るなら公演を見て欲しいというのが無名塾側の要望だった。商店振興会などからは、町民との触れ合いの機会を作って欲しいという要望が強く、中日に公開練習の日を1日だけ設けてもらったところ、300人以上の町民が集まった。
- 2年目の合宿が終わる頃には、塾生も町に打ちとけ、私たち町民のことを信頼してくれるようになり、3年目からは全ての合宿が公開となった。
- なお、無名塾の塾生は4回生まで（4年で卒業）。

③ 現在の関係

- 仲代氏は現在名誉町民で、能登演劇堂の名誉館長でもある。
- 現在は、能登演劇堂の催し物の内容を相談したり、仲代さんにロゴを書いてもらったり、無名焼きという焼き物を作ってもらったりする間柄になっている。将来的には、能登演劇堂グッズのようなものも開発したい。
- 去年から、無名塾の地方公演は、ここから他の地方へ出るということで、能登演劇堂からスタートするようになった。能登演劇堂は、舞台後壁の大扉が開いて屋外の自然空間と一体的な演出が可能な構造となっており、ここではその特性を活かした「中島町バージョン」が上演されている。
- 以前は、最後の1ヶ月間は東京で稽古をして作品を仕上げており、中島町の合宿の内容も立ち稽古が始まった段階のものだったが、去年からは仕上げ段階のものになった。
- 合宿の場所は能登演劇堂で、舞台装置をセットし、地方公演を回るための解体手順のチェックなどもここで行っている。舞台の仕込みは夜中までかかったり、舞台のセットが直前に変わって大工や電気工事の技術者を至急手配しなければならないようなこともあるが、演劇堂のスタッフは柔軟に対応している。
- これまで公演をやらない年も何回かあったが、その年も中島町の合宿だけは行っていた。そういう時には、中島町の伝統太鼓を塾生に教え、「無名塾能登中島太鼓」と名付けた太鼓や法被を寄付した。
- 無名塾と中島町の関係は、徐々に成熟して、互いに支え合うような関係になりつつある。来年は1ヶ月のロングラン公演を行う予定。

(2) 能登演劇堂の建設の経緯

- 当初、無名塾が合宿を始めた頃は非公開で、町民の中に完成された公演を見たいという声が出てきたため、30人程度のバスツアーを企画し、東京まで公演を見に行っていた。
- 懇親会も兼ねたもので、実際の動機は芝居が見たいというのが半分、東京に行きたいというのが半分だったと思う。
- そのうち、中島町出身の東京在住者が、せっかくだからということで、一緒に芝居を見るようになり、東京では無名塾の評価が高いことがわかって、それが町にも伝わるようになった。
- そのうち、無名塾の中島町での活動が定着するようになって、ある新聞社の文芸部が平成3年に催した座談会の中で、仲代さんが「能登に無名塾の拠点があるといいなあ」というような発言をされ、それを石川県の関係者も見ていた。
- そうしたことから、能登演劇堂の建設構想が持ち上がり、自治省の「若者定住緊急プロジェクト」に認定され、建設予算の目処が立って実現した。結局、無名塾の10年間の活動が認められ、自治省のプロジェクトに認定されたのだと思う。

2. 能登演劇堂振興協会と演劇堂の運営

(1) 能登演劇堂振興協会

① 設立の趣旨

- 能登演劇堂振興協会は町内の約30の各種団体代表者が集まった任意団体で、能登演劇堂の活用を促進し、地域の芸術文化の高揚に寄与することを目的に設立されている。
- 実際の活動内容としては、自主事業の演目の検討、広報・宣伝、チケットの販売、友の会の会員勧誘、地元企業等からの協賛金集めなどを行っている。企画面やチケット販売面で民間の知恵や力を借りるのがその趣旨。
- 演劇堂の管理・運営は町の直営で、自主事業は協会が中心になって運営している。

② 協会の運営と業務の内容

- 総会は年2回開催しており、1回が自主事業の演目決定のため、もう1回は決算報告のため。
- この他に会長、副会長、理事数名からなる役員会も設けられており、こちらはもっと頻繁に会合を開いて、演劇堂の運営をさまざまな形でサポートしている。役員のメンバーは自由業の方が中心で、日中に会合を開くことも多い。
- 事務局は町の文化振興課のスタッフが担当。
- この協会の委員や役員は、無報酬で、そういう意味では能登演劇堂の運営を支える一番のボランティアといえる。
- 協会の運営財源としては、自主事業のチケット販売による手数料収入と協賛金収入で、年間の総予算は500万円程度。その内の約半分ぐらいが、自主事業の広告や宣伝費に使われている。
- 催し物の宣伝や広告、協賛金の募集といった業務を、町という行政体が直

● 能登演劇堂振興協会規約（抜粋）

（名称）
第一条　この協会は、能登演劇堂振興協会（以下「協会」という。）という。
（事務所）
第二条　協会の事務所は、石川県鹿島郡中島町甲部130番地の中島町文化センター内に置く。
（目的）
第三条　協会は、能登演劇堂（以下「演劇堂」という。）の活用を促進し、地域の芸術文化の高揚に寄与することを目的とする。
（事業および活動）
第四条　協会は、前条の目的を達成するため次の各号に掲げる事業及び活動を行う。
(1) 自主事業の企画や運営にあたり、その振興を図ること。
(2) 地域芸術活動の支援に関すること。
(3) その他目的を達成するために必要な事業及び活動。

－以下省略－

接行うことは難しい面があるため、協会組織を介して実施している。チラシの印刷も協会が実施しており、新聞やテレビ、屋外広告なども必要に応じて使うことがある。

- 協賛金については、法人3万円、個人1万円ということで協力をお願いし、今年度は約90の会社や個人から約250万円が集まった。半分が町内の方で、企業が支出する場合は広告宣伝費として必要経費扱いになっている。

(2) 能登演劇堂友の会

- 友の会は、基本的に能登演劇堂振興協会の下にある組織で、いい芝居をひとりでも多くの人に見てもらうのが目的。
- 毎月1,500円（年間1万8千円）の会費を納めると、年に4回の定期公演を見られるしくみ。現在の会員数は1,814名。劇場の座席数は651席なので、3公演分の会員が加入している計算になる。
- 企画の内容も、隣町や金沢市ではやらないもので、直接中央の劇団を招くことを基本にしている。
- 中島町の周辺人口は20～30万人で、金沢からも遠いし、日中はほとんどの人が働いていて、チケットをどうやって売るのかということが大きな課題になっていた。

● 能登演劇堂友の会運営要項（抜粋）

能登演劇堂友の会会員を次により募集する。

1. 目的

「能登演劇堂」において、すぐれた現代演劇を鑑賞しようとする者の会（「能登演劇堂友の会」という。）を組織し、演劇愛好家の拡充と入場者の安定確保を図ることを目的とする。

－途中省略－

3. 会員の特典

会員は次の特典をうけることができる。

(1) 会員名簿へ登録し会員証を発行する。
(2) 最新の演劇情報誌等の郵送
(3) 年間4回の現代演劇を座席指定で鑑賞
(4) 座席指定の公演には、会員に限り一般前売り前に優先予約ができる。

4. 会員の資格

(1) 毎月の会費を納入している者。
(2) 会員期間は、毎年4月1日から翌年3月31日までとし、従前の会員は退会の申出がない限り継続するものとする。
(3) 年度途中の入会は、その月以降の会費に1ヶ月分を加算する。（ただし、4月入会の場合は加算しない）
(4) 会費の納入が3ヶ月以上滞った場合、会員資格を失う。

－途中省略－

6. 会費

(1) 会費は月額1,500円とする。
(2) 毎年4月分から納入するものとする。
(3) 納入は、毎月納、前納（一括、分納）のいずれでもよい。

－以下省略－

- そこで、会費をもらって現代演劇を中心に鑑賞してもらう友の会を設置することとした。いわゆる鑑賞団体に近い形だが、これまでの鑑賞団体の制約（会員は通信効率の観点から複数で加入しなければならないとか、会の運営に対してボランティアをしなければならないなど）は排除し、会員に公演の案内を送って、鑑賞することだけに特化したしくみとした。
- 募集したところ1ヶ月で650人が、2ヶ月で1,300人の会員が集まった。劇場のキャパは650席なので、昨年5月の柿落としでは2回公演を行うことができた。その後、昨年の12月から3ステージ分を目標に再度募集を始めたところ、約１割の人が退会し、7月末現在で新たに650人が入会している。
- 演目によって入会状況が異なるのが実状。平均年齢は49才で、それに見合った内容の公演を考えていく必要がある。正直なところ、現代演劇は1～2割の人が賛同してくれる程度で、多種多様な要求にどう対応していくのかが今後の課題。
- 会員を継続するためには、最後にわかりやすいものを持ってくるなど、4回の演目の順序も重要だと思う。
- 会員の募集は、2市10町（人口約16万人）を対象にしたが、現在の会員の約8割はそのエリア（車で30分前後の圏内）の人。中島町内の会員は750名で全体の45%。町の人口は現在約8,000人だが、有権者（成人）の数は6,500人であることを考えると１割以上の組織率ということになる。
- 会員数は、3公演分の2,000人程度が限界だと考えている。2,000を越えると郵送などの事務作業が膨大になるし、演目のメニューを今以上に増やすことも必要になると思う。

(3) 能登演劇堂振興協会と無名塾能登後援会

- 能登演劇堂振興協会とは別に、無名塾能登後援会という組織があって、10年間活動を展開している。活動の一環として演劇を見に行ったり、Ｔシャツやテレフォンカードを作って売ったりしている。
- 能登演劇堂振興協会の構成メンバーは各会の代表者で、必ずしも30名全員がこの演劇堂の活動に興味があるとは限らない。官の要請でできたような側面もあり、会員の所属団体にチケットを売れるという読みもあった。
- 能登演劇堂振興協会とメンバーは若干重複しているが、こちらは、各界の実務者（若い人）が集まって実質的な活動ができるようなしくみになっている。

3. 舞台芸術アカデミー（裏方ボランティア）とオモテ方ボランティア

(1) 導入の経緯（舞台芸術アカデミー）

- 舞台芸術アカデミーという照明・音響・舞台に関する研修事業を、施設がオープンする前の平成6年から隣町の鹿島町と共同で実施していた。会場は中島町役場の会議室や「ラピア鹿島（鹿島町の多目的ホール）」。
- その背景には、裏方業務を外部委託するとお金がかかるということで、何とかこのアカデミー受講生によって、ボランティアで対応できないだろう

か、という目論見があった。

- これは、七尾・鹿島広域圏のソフト面の補助事業として実施しているもので、当初40名ぐらいが集まったが、最初の何回かが実技を伴わない講義だけの研修であったこともあり、少し人数が減って30名前後になった。
- その後、能登演劇堂ができて、平成8年からは中島町と鹿島町がそれぞれの施設で開催するようになった。能登演劇堂が演劇専用劇場であるのに対し、ラピア鹿島は多目的ホールであるため、双方の劇場に必要とされる技術が異なるということもその理由のひとつ。

(2) ボランティアの概要（舞台芸術アカデミー）

- 中島町で現在そのアカデミーを受講している人は約15名で、基本的には全員に裏方を手伝ってもらっている。15名のうち半数は町の職員、一般の人は30代の人が中心で、女性も3名含まれている。
- 弁当代を劇場が負担することはあるが、基本的には無償ボランティア。ほとんどの人が町内在住なので交通費も支給していない。
- アカデミーの受講料は無料。

(3) ボランティアの業務内容（舞台芸術アカデミー）

- プロの公演の場合、照明・音響・舞台等のスタッフは同行してくるため、実際の業務としては、専門家の技術操作を見て学んでいる状態。「無名塾」の公演の際も、横について見学しながら学習できるようにしている。
- ただ、今年の公演のうち、7月の「方の会」公演「しんしゃく源氏物語」では、ボランティアが舞台制作・音響・照明のサブスタッフを務め、また、9月の永六輔のバラエティショーでは、舞台監督だけが派遣された専門家で照明・音響のオペレーションはボランティアが担当した。
- 自主事業の公演の際には、都合の悪い人を除いて必ず劇場に来てもらうようにしている。年間25日ぐらいで、1日の平均業務時間は、搬出や後片づけを含めて18:00頃から22:30ぐらいまで。ボランティアのうち町の職員については、残業がない限り基本的に手伝ってもらっている。
- 舞台芸術アカデミーは、年間約10回の研修会で、講師は能登演劇堂の舞台設備を納入した専門家にお願いしている。舞台の設備のことを熟知しており、また、講師謝礼等についても柔軟に対応してくれるため。
- 舞台芸術アカデミーの受講者は、基本的に初年度からの継続者で、講義内容等も年々実践に即したものになっている。劇場の運営は町の直営で、町の職員は異動することがあっても、ボランティアは継続してやってもらえるため、ボランティアの中にノウハウが蓄積されていけばいいと思う。
- アカデミー受講の動機としては、舞台音響に興味があった、昔バンドで音響を担当していたなど。金沢で舞台関係の仕事をしている人もいる。劇場職員の知り合いを経由して口コミで集まった人がほとんど。
- 劇場付きの技術スタッフは2名で、日中の事業は職員が対応している。ただ、日中の事業は講演会のようなものが中心で、舞台芸術の公演のように複雑なオペレーションは少ない。

- 昨年度の実績では、年間の劇場使用日数は約35日で、そのうちの半分が貸し館。
- 搬出入は、職員が研修を兼ねて対応している。

(4) オモテ方ボランティア（もぎり・会場整理）

- もぎり・会場整理については、有償ボランティア(時給1,000円)ということで、開館時から町内の女性10名にお願いしている。
- 少ない職員ではオモテ方に対応できないため、スタッフをどう集めるかが、当初から課題になっていた。婦人会にお願いすることも検討したが、年輩の女性は夜間の対応が難しく、未婚の女性に声をかけてお願いした。
- 通常の業務時間は3～4時間程度。

4. 今後の展望

(1) ボランティアについて

- ボランティアの基本は、参加できる喜びだと思う。
- 最近では、官がボランティアの導入を促進しようとしているが、それを官自体が阻害しているような面があるのではないか。民間の場合、残業をしたり休日出勤しても報酬を払うことはできないが、官の場合は、残業代が支給される。
- ボランティアの問題点としては、責任の所在がどこにあるのかが不明確になる点。会合に出席したときだけボランティアをしているというようなことになりかねない。能登演劇振興協会の場合も、事務局は演劇堂を運営する町の文化振興課が担当している。
- ただ、演劇堂を円滑に運営するため、官がやるべきこと、できることと、民がやるべきこと、できることははっきりと区別して使い分けている。

(2) 能登演劇堂と地域づくり

- 商業演劇が来て公演するだけでは、ただの消費の場になってしまう。この能登演劇堂とこれまでに蓄積してきた活動を使って、町民が何をやるかという発想が重要。

① 戯曲募集と演劇人材の育成

- そのひとつのきっかけとして、昨年12月末に全国の高校生を対象にした戯曲の募集を行った。文部省の関連組織である全国高等学校文化部連盟（高文連）を経由して各県に募集要項を配布したところ、すでに何件か問い合わせがある。
- 中島高校には以前演劇コースがあった。現在の学校教育は文化よりスポーツが中心になっているが、特色ある高校を作るということで、この演劇コースを演劇科として再度設置したいと考えている。
- 高等学校で正式な演劇科を置いているところは現在国内で僅かに3ヶ所。今後、若者人口の減少とともに、高等学校もこの近辺では10校中3校が閉鎖されるような時代になると思う。

- 演劇科を卒業したからといって、必ずしも演劇人になる必要はないし、多様な価値観を持った若者を育てるためにも、演劇科の設置は有効だと思う。
- 将来的には、町民劇団のようなものを作ってはどうだろうかということも検討中。

② 演劇を核にしたまちづくり

- これらのことをとおして、演劇を介したまちづくりのようなことができばと思う。演劇によって人々が町を訪れ、情報が行き交い、ひいては経済的な波及効果も生まれる、といったことも考えたい。
- 言い換えれば、文化もカネもやってくるということで、アメリカのオレゴン州では、シェイクスピア劇場によって、交流人口も定住人口も増加し、まちづくりに成功した例があると聞いたことがある。
- 能登に新しい飛行場が建設される計画があるが、能登の地域ひとつひとつが特色を持ったパビリオンとして、能登地域全体がひとつのテーマパークのようになればいいと思う。その時、中島町はどこにもない演劇のパビリオンとして特色を打ち出していきたい。

－以上－

■ *中島町文化センター／能登演劇堂*

● 参考：平成８年度の自主事業のチラシ（賛助会員のリストが右端に掲載されている）

チケット販売所

- 能登演劇堂 TEL(0767)66-2323
- 中島町商工会 TEL(0767)66-0349
- (有)ながたに TEL(0767)66-1226
- レディースファッションわかこ TEL(0767)66-0558
- パトリアサービスカウンター TEL(0767)54-0777
- アスティ池田書店 TEL(0767)52-7300
- アルプラザ鹿島 TEL(0767)76-2211
- 菊澤書店本府中店 TEL(0767)52-0350
- ファミィ(輪島) TEL(0768)22-8181
- サンポア(輪島) TEL(0768)22-7711
- 菊澤書店穴水店 TEL(0768)52-2410
- うねだや(輪島) TEL(0768)22-4661
- 北市(有)(志賀町) TEL(0767)32-0138
- (有)サカイ事務機(富来町) TEL(0767)42-2255

Ⅲ. 武生市文化センター／武生国際音楽祭

武生市文化センターを中心に開催される「武生国際音楽祭」は、民間ボランティアによる実行委員会によって運営されている。各実行委員の役割など文化施設主導型のボランティア活動とは運営のしくみが異なるだけでなく、フェスティバルという年間のある一定期間に集中した事業に対するボランティアである点にも注目したい。

施設・運営の概要

運営母体	(財)武生市文化振興財団・施設管理事業団
所在地	福井県武生市高瀬 2-3-3
TEL	0778-23-5057
FAX	0778-21-1975
開館年月	1980 年 9 月
複合形態	複合館
施設特性	多目的ホール
座席数	大ホール 1196 席、中ホール 726 席 小ホール 220 席
自主事業予算	年間 1,000 万円（国際音楽祭は除く）
自主事業数	年間約 10 本（　〃　）
立地都市人口	70,161 人
組織体制	9 名（総務 3、企画 2、技術 3、その他 1）

ボランティア制度の概要

名　称	・武生国際音楽祭推進会議（毎年9月に組織）
導入時期	・1990年
登録人数	・60名
導入の経緯	・第 1 回武生国際音楽祭開催のための実行委員会（武生市主導）が組織され、その委員会に市民がボランティアとして参画していた。その後次年度以降の音楽祭継続に向けて、ボランティアのみの実行委員会を組織。実質的な音楽祭の実施・推進・主催団体となる。
活動内容	・企画・制作、広報・宣伝、受付・案内、教育普及活動
募集方法	・公募（音楽祭開催中のチラシ、市の広報等）、口コミ
研修	・特になし
実費支給	・なし
その他	・武生市文化センター内に推進会議の事務局を設置。ボランティアコーディネーターが総括。 ・①音楽祭開催前、②音楽祭中、③音楽祭後の３段階に分けて体制・業務内容を整理。 ・国際音楽祭の予算は4,500万～5,000万円。財政的な責任まで全て推進会議で負う。 ・会員制の任意団体から、財団化・社団化などの法人化の可能性を模索している。

施設側インタビュー記録

1. 武生国際音楽祭の開催までの経緯等

(1) 第１回音楽祭開催のきっかけ

- この音楽祭は1990年に「フィンランド音楽祭'90 in 武生」として開催されたのが最初。フィンランド在住のピアニスト舘野泉氏が東京で1989年に開始したもので、90年に地方展開の一環として武生で開催されることになった。
- 文化センターでコンサートなどを開催していた「音楽研究会」というピアノの先生の市民グループがあって、最初はそこに話があった。そのグループが市長と文化センターに話を持ち込んだのがきっかけ。
- 文化センターはちょうど10周年を迎えており、クラシックに力を入れていたが、聴衆の広がりという点で課題があった。音楽フェスティバルを開催すれば、市民と親密な関係の事業ができ、武生にもいい刺激になってプラスになるだろうということで、実施することとした。
- 市長も新任で、新しいことをやりたいと考えており、市の補助金300万円も付いて、フィンランドのアーティストを招聘した。市をあげての事業として、市の関係機関の商工会議所や青年団、婦人会にも声をかけ、音楽研究会のメンバーとともに30名の実行委員会を組織した。
- 実行委員長は、音楽研究会の代表でシンセサイザー音楽の作曲なども手がける高木芳盛氏が就任。ただ、実行委員会が組織されたのは前年の12月で、開催まで半年しか残されていなかった。
- 来日アーティストについてはフィンランドの方で決まっていたが、その他の準備事項はよくわからなかったというのが実状。実行委員会は、それぞれの組織の代表者とボランティアベースで参加している個人とがいて、会合ではなかなか内容が固まらないまま音楽祭に突入していった。結局、音楽祭はばたばたと始まることになったが、終わってみるとそれなりにうまくいっていた。
- 運営費としては、市の予算300万円と市内企業からの寄付金500万円（1社50～100万円）の800万円があてられた。
- 森と湖の国というフィンランドのイメージが良かったこと、前夜祭（2,000人が参加）などで事前に浸透を図ったこともプラスに働き、予想以上の成果があった。マスコミも応援してくれ、入場料収入もかなりの額になった。

(2) 第２回音楽祭

- 現在のボランティア組織が生まれたのは2回目のフェスティバルになってから。議会や市内企業には1回限りということで協力を要請したため、2回目以降の開催についてはあまり協力的ではなかった。
- まず、第1回の音楽祭に個人の立場で参加していた実行委員12～3名が集まり、何度となく検討した。その中で、音楽研究会メンバーの友人として参

加した人たちから、既存の市の祭やイベントは必ずしもうまくいっておらず、音楽フェスティバルのようなものが武生にあることはいいことだという意見が出た。

- また、その時に集まったメンバーは、街としての活力不足などにも強い危機感を持っており、万一うまくいかなくても一人50万円ぐらい覚悟すれば10人で500万ぐらいなら何とかなるだろう、ということで、10月から翌年の準備を開始した。
- その時に集まったメンバーと、文化センターのメンバーが声をかけて50人の実行委員会を組織。第1回目の実行委員会と異なり、既存組織の代表者のような人はいなかった。男性は30～40歳代が中心で、武生の街づくりに危機感を持っている層が、女性は20～30歳代が中心でピアノの先生などが集まった。
- フェスティバルの事務局は第1回目と同様、文化センターが務めたが、同時に文化センターの職員は全員が個人として実行委員会のメンバーに参加。
- 第2回目のフェスティバルは、舘野泉氏を芸術監督に「フィンランド音楽祭 '91 in 武生」として開催された。

(3) 第 3 回目以降

- 3回目から名称を「武生国際音楽祭 '92」とし、主催が実行委員会から現在の「武生国際音楽祭推進会議」に変わった。
- 実行委員会では音楽祭が終わると組織が解散し、半年間活動が途切れていたが、音楽祭を準備するには1年ぐらいかかり、組織としてきっちりとしたものにする必要があったため。
- また、音楽祭を支える傘のような組織として理事会を作り、市民の有力者に理事になってもらった。理事長は病院院長で音楽祭にも来ていた笠原氏に依頼、その他会社社長や実行委員会の元委員など、20名以内のメンバーで理事会を構成。
- 音楽祭の内容に関しては、舘野氏の要請によって東京で開催されるフィンランド音楽祭を支える形で、フィンランドだけをテーマにしたものではやっていけないという意見が出された。
- そこで、第2回目の音楽祭に出演し、海外にもネットワークのあったピアニストの高橋アキさんに協力をお願いし、オランダとデンマークの演奏家を招聘することとした。
- オランダ、デンマークに焦点を当てたのは、あまり大国にしたくなかったため。高橋アキさんのネットワークということで、自然と現代音楽のウエイトが大きくなった。
- 3年目、4年目は音楽監督は置かず、高橋アキさんにアドバイザーをお願いし、フィンランド関係半分、現代音楽半分という音楽祭となった。現代音楽を取り上げたことで情報発信という点ではたいへん成功したが、逆に観客は減少した。
- そうしたこともあって、音楽祭は1994年の5回目に大きな方向転換を行っ

● 武生国際音楽祭'96 スケジュール

TAKEFU INTERNATIONAL MUSIC FESTIVAL '96 SCHEDULE

	武生市文化センター大ホールコンサート Takefu Bunka Center Main Hall Concerts	周辺市町村コンサート Run-out Concerts	ティータイムコンサート Tea-Time Concerts	スクールコンサート School Concerts	寺社コンサート Temple & Shrine Concerts	講習会、レクチャー等 Master Classes, Lectures and etc.
6/1 [Sat]	6:00 p.m. オープニング ガラ＆ウィンド オーケストラコンサート Opening Gala Concert & Band Concert					
6/2 [Sun]	7:00 p.m. リー・ジャン ピアノ リサイタル Li Jian Piano Recital 10:30 a.m. 子供のためのコンサート Ⅰ ホワイエ Concert for Children Ⅰ Lobby		2:00 p.m. レストラン 夢屋 チェロと アコーディオン		7:00 p.m. 大塩八幡宮 二 胡	1:00 p.m. 武生市文化センター小ホール ピアノマスタークラス
6/3 [Mon]	7:00 p.m. 許 可(シュイ・クゥ) 二胡 リサイタル Xu Ku Erhu Recital 1:00 p.m. プラハ放送交響楽団 オープン リハーサル Open Rehearsal of Prague Radio Symphony Orchestra	2:00 p.m. 能楽の里文化交流会館(池田町) チェロ、アコーディオン、サキソフォーン&ピアノ		2:00 p.m. 武生第一中学校 ボリショイ劇場 六重奏団		
6/4 [Tue]	7:00 p.m. プラハ放送交響楽団スペシャルコンサート Prague Radio Symphony Orchestra Special Concert	2:00 p.m. 河野中学校 ボリショイ劇場 六重奏団		2:00 p.m. 武生第六中学校 チェロ、アコーディオン ＆ピアノ	10:00 a.m. 引接寺 チェロと アコーディオン	
6/5 [Wed]	7:00 p.m. アコーディオンとチェロによるコンサート Accordion and Cello Concert	7:00 p.m. いまだて芸術館 ボリショイ劇場 六重奏団		11:30 a.m.武生万葉中学校 カナダ室内アンサンブル(木管、打楽器) 2:00 p.m.武生西小学校 カナダ室内アンサンブル(金管)		
6/6 [Thu]	7:00 p.m. タケフインターナショナルトリオ コンサート Takefu International Trio Concert	7:00 p.m. 南条文化会館 カナダ室内 アンサンブル	2:00 p.m. ボナ・ペティート アコーディオン	2:00 p.m. 武生第五中学校 ボリショイ劇場 六重奏団		
6/7 [Fri]	7:00 p.m. カナダ室内アンサンブル コンサート Canadian Chamber Ensemble Concert	7:00 p.m. 織田町中央公民館 ボリショイ劇場 六重奏団		1:30 p.m. 武生第三中学校 チェロ、アコーディオン ＆ピアノ		1:30 p.m. 武生市文化センター小ホール 声楽講習会
6/8 [Sat]	7:00 p.m. ボリショイ劇場六重奏団コンサート Bolshoi Theatre Sextet Concert 11:00 a.m. 子供のためのコンサート Ⅱ ホワイエ Concert for Children Ⅱ Lobby		3:00 p.m. レストラン ピエトロ ヴァイオリン、チェロ ＆アコーディオン			1:00 p.m. 武生市文化センター練習室202号室他 フルート、オーボエ講習会 2:00 p.m. 武生市文化センター小ホール 音楽祭アカデミー
6/9 [Sun]	3:00 p.m. ファイナル スペシャルコンサート Final Special Concert				10:00 a.m. 毫攝寺 ヴァイオリン、チェロ ＆アコーディオン	1:00 p.m. 武生市文化センター小ホール 音楽祭フォーラム ＆トーク

た。具体的には、以前武生でのコンサートに出演したこともある福井県出身の指揮者、小松長生氏に音楽監督をお願いし、現代音楽の継続性を維持しながら市民に受け入れられやすい企画も取り入れるようになった。

2. ボランティアによる音楽祭の運営方法

(1) 武生国際音楽祭推進会議について

① 推進会議の位置づけ

- 音楽祭はこの推進会議が主体的に行っており、企画内容から財政的な面まで責任を持っている。従って、音楽祭は厳密に言うと武生市文化センターの自主事業ではない。
- (財)武生市文化振興・施設管理事業団は、武生市文化センターの運営を市から委託されているいるが、時として推進会議と市の板挟みになることもある。
- センターは音楽祭とは別に、市から1,000万円の補助金を得て年間約10本の自主事業を実施している。

② 会員の構成

- 会員数としては当初100名をめざしたが、現在のメンバーは約50人。会員は、女性が若干多い。男性は30～40歳代が、女性は20～30歳代が中心。
- 年によって若干の入れ替わりがある。最初の音楽祭の時に高校生で演奏会を聞き、その音楽祭のボランティアをやってみたいということで、最近加入したメンバーもいる。
- 武生東高校には国際科という学科があって、そこの留学経験のある女子学生も語学能力を活かしたボランティアとして参加している。
- 会員50名のうち、常時音楽祭の活動に積極的に参加しているのは約30名。残りの20名は、期間中に応援をお願いすると手伝ってくれるメンバー。
- ただ、7年間やってきて最初からやっているメンバーの中には疲れてきている人がいるのも事実。また中には、例えば外国人との交流やプログラムデザインなど、やりたいことはやっても、チケットを売るのは苦手でやらないといったメンバーもいるようだ。
- 現在の事務局長は歯科医の山本有一郎氏。2年目から参加した方で、青年会議所の副理事長を務めたこともあり、組織の中でリーダーシップを発揮してくれている。
- 山本氏の参加の動機は、1回目の音楽祭の時に、舘野泉氏に音楽祭の方向性を質問したところ、舘野氏の「“黄金の中道”を行く」という答えに賛同して参加するようになったとのこと。

(2) ボランティアの業務内容

- ボランティアの業務内容は次のとおり。ボランティアの運営システムということでいろいろとシステマチックに考えたこともあるが（役割分担、業務の流れ etc.）、必ずしもそのとおりうまくいくとは限らない。

① 音楽祭準備期間

- 宣伝班
- ウエルカムスタッフ班：交流会、おみやげ物の手配
- デザイン班：文化センター内、屋外の演出デザイン検討
- Festival Shop 班：グッズ探し、購入
- マップ班：イラスト入り武生市内マップの制作（日本語＋英語）
- テレ・マーケティング班：電話によるチケット・セールス
- 情報収集・発信班：国内外のフェスティバルの情報収集
- プログラム製作班：プログラムデザイン、原稿依頼、プロフィール作成、曲目解説、広告依頼など
- ポスター・チケット・チラシ・のぼり班：デザイン・制作等
- アンケート製作班：アンケート用紙の作成
- ホームステイ班：演奏家の希望確認、ホストファミリー探し

② 音楽祭期間中

- 接客スタッフ：来賓、マスコミ、大使館関係者対応など
- 通訳スタッフ
- ウエルカム・スタッフ：交流会、さよならパーティの運営、進行
- 託児所スタッフ：保母資格保持者を常時配置
- 記録スタッフ：写真・ビデオ撮影、録音、プレス記事切り抜き
- ホームステイ・スタッフ
- バックステージ・スタッフ：楽屋係、影アナ
- アッシャー・スタッフ：ホール内の観客誘導
- アウトサイド・スタッフ：駐車場係
- ロード・スタッフ：演奏家の送迎

③ 音楽祭後

- アンケート回収・分析班
- 記録収集班：写真アルバム整理、ビデオ編集
- 報告書作成班
- 収支決算書作成班：文化センター職員が担当
- 反省会：ボランティア全員

(2) 運営方法

① 運営体制

- 財政的な面については、最終的に推進会議の理事会が、事務処理は文化センターの事務局が責任を持つことになっている。
- 文化センターの館長は、推進会議の理事を兼ねており、対外的にはアーティスティック・アドミニストレイター（Artistic Administrator）として芸術監督とともに企画とりまとめの中心的役割を果たしている。ただし、あくまでも推進会議の合意が前提。
- 文化センターの職員はすべて財団のプロパー職員で、全員が推進会議の会員になっている。事業団の部課長クラスは市からの派遣職員。
- 3年目からボランティア・コーディネーターを中心に音楽祭運営の体制を統括している。

② 募集方法

- 音楽祭のアンケートにボランティアとして参加してもいいかどうかという設問を設けておき、参加してもいいと答えた人に積極的にアプローチ。
- 新聞での広報、市の広報誌にも掲載。口コミでの勧誘も行っている。

③ 会費

- 現在は、組織としてきっちりとしておきたいということで、5,000円の年会費を集めている。最初は1万円だったが、若い人にも入ってもらおうという趣旨から最近5,000円という金額になった。
- また、当初は実行委員は一般の観客と同じように入場券を購入するのが原則だったが、現在は入会すれば演奏会が見られるようになっている。
- 会費については、音楽祭の会計とは分けて一般会計として経理処理。

④ 保険

- 音楽祭期間中のみボランティア保険をかけている。

⑤ 経費

- ボランティアは基本的に無償ということで、当初は演奏家の送迎に関する東京や大阪までの交通費も自己負担していたが、現在は、こうした経費については推進会議が実費を支給。
- 事務局は文化センター内に置かれているため、いわゆるオフィス代や通信費などはセンターが負担しているが、国際電話・ファックス、コピー用紙の費用については、推進会議が負担。
- 文化センターは、弁当や交通費などを支給することはない。

⑥ 友の会組織

- センターとして友の会組織はないが、DM 発送用として2,000名のメーリングリストがある。

(3) 音楽祭の運営予算

- 音楽祭の総事業費は4,500～5,000万円。
- 今年度の収入の内訳は次のとおり
  - 市助成金 : 400万円
  - 文化庁及び福井県助成金 : 1,080万円
  - 入場料 : 1,500万円
  - 周辺市町村負担金 : 500万円
  - メセナ(民間助成) : 200万円（三菱信託芸術文化財団、花王芸術文化財団）
  - 地元企業の協賛 : 700万円
  - 雑収入 : 50万円（グッズ売り上げ等）
- 文化庁からの助成金は、この音楽祭が、今立町の“紙展”と池田町の“田楽の里づくり”とあわせて「文化のまちづくり事業」に認定されたため。丹南地域まちづくり事業として県の助成金を含め、3つの事業に、2,000万円が5年間継続して助成されることになっている。

- 文化庁の助成金は事業が終わってから、つまり1年遅れで入金されるため、その間借金する必要があるなど、実際の資金繰りでは苦労することも多い。市の助成金は5月に支給される。
- 周辺市町村の負担金というのは、音楽祭にあわせて周辺市町村へ演奏家を派遣し演奏会を開催する事業を実施しており（6回のスクールコンサートも含む）、その費用として市町村に負担していただいているもの。
- 支出としては、交通・宿泊を含めた出演料が約3,000万円。残りがその他の運営費用。推進会議は、武生市文化センターの使用料（80～90万円程度）を払っている。
- 会計処理は、事業団に準じた形で行われており、市の監査もある。

3. 課題・今後の方向性

(1) 音楽祭の今後の方向性

- 小松長生氏には3年間音楽監督を務めていただいたが、音楽監督制に関しては、メリットとデメリットがあり推進会議でも意見が分かれている。ただし、来年度は継続していただくことが決まっている。
- 5年目に方向転換してから、一般の市民にはわかりやすくなったが、クラシックファンにとっては少しものたりないといったような声もある。ただし、長い目で見て、地元出身の小松氏にもこの音楽祭と関わることによって成長してもらえればと考えている。
- 現時点では10回までは続けたいと考えている。長い目で見ると、2回目の方向転換は正解だったと思う。方向転換したことで、音楽祭設立当初のメンバーで推進会議を離れ、別の事業を企画して実施しているグループもある。
- 舘野氏は引き続き県内のコンサートに出演しているし、推進会議を離れたメンバーの中には「越前冬のコレクション」という別の企画を実施している人もおり、結果的に音楽祭がきっかけとなって幅広い音楽活動につながっていると思う。

(2) 推進会議としての課題、方向性

- 現在の推進会議は組織的には任意団体。企業寄付に対応したりするためには、できれば基金のようなものを持って、例えば財団や社団のような組織化を図りたい。
- 現在は出演者等との契約は推進会議の理事長名で、入国ビザの申請は公的機関の方が望ましいため、事業団の理事長名で行っている。
- 理事長、事務局長クラスの人は後任がいない。文字どおりボランティア精神に頼ってきたため、“気持ちの上での切れ”のようなものがコワイ。
- 理事会の役員についても、組織的な引き継ぎが難しい。また、役員人事は本来なら会員からの推薦によって選出されるべきだが、必ずしもそうはいかない。
- 推進会議のメンバーは、このボランティア活動が個人的なものだけではなく社会的な意義を有したものであり、そうした責任に対する自覚を持って

いるが、“そこまでは付き合いきれない”といった場面もある。

- 業務を円滑に行うため、専任事務局員というスタッフを雇って（時給1,000円、音楽祭費用で対応）欧文レターのやりとりなど、アーティスティック・アドミニストレイター（Artistic Administrator）としての館長の業務を補佐してもらったこともある。しかし、そうした常駐スタッフがセンターにいると、本来ボランティアがやるべき仕事まで、その人に頼んでしまうようなことが起こり、結局その制度はうまく機能しなかった。
- 9月からは専任アルバイトとして違う人に来てもらい、ボランティア通信の編集業務などをお願いしている。時給は同じく1,000円だが、音楽祭経費とは別に確保する方向で検討中。

－以上－

☺ ボランティア・インタビュー記録 ☺

Aさん（武生国際音楽祭推進会議 理事・事務局長、歯科医）
Bさん（武生国際音楽祭推進会議 会員、自営業）
Cさん（武生国際音楽祭推進会議 会員、会社員）
Dさん（武生国際音楽祭推進会議 会員、武生市文化センター職員）

1．参加の動機

Aさん｜東京で最初にフィンランド音楽祭を開催した時点で、主催者の舘野さんが地方都市での受け皿を探しており、２回目から武生での開催が決まった。最初は官主導で文化センターが実際の受け皿になり、市内の各種団体に声がかかった。丁度青年会議所に属していたため、そこからの代表として参加することになった。

- 音楽祭自体には特別な思い入れはなかったが、これが街おこしの材料になる、ネットワークを拡大できる、子供達の感性の育成につながる、などの派生的な要素にむしろ可能性を感じた。一回目は無事に終わった。一回限りの開催のつもりであったのが、二回目も開催することになり、そのとりまとめ役を依頼された。
- 滞在型の音楽祭とすることで、アーティストとの個人的なネットワークができるし、①最低限教育的効果はある、②うまくいけば経済波及効果も生まれる、③さらには音楽祭を通して街おこしなど政治に関心をもつ人が増える可能性がある、と考えた。

Bさん｜市内で印刷屋をしているので、ボランティアのメンバーとは個人的に接点が既にあった。また、10年ほど前から市民運動等には参加していて、ジャンルに関係なく市民のための催しを行っていた。武生の街づくりについて考える市民グループにも所属していたことがあるし、社会福祉系のボランティアは今でも継続している。

- 武生音楽祭の運営については、観客の反応を聞いているうちに、つくりあげる喜びややりがいを感じるようになった。音楽祭のボランティアが他の市民団体と異なる点は、活動している人達の目的が明確で、各論をやっていても必ず根本にフィードバックされているところだと思う。理事会もボランティアメンバーに議論する機会を与えている点が違う。

Cさん｜もともと音楽が好きだった。6回目の音楽祭の時に初めて観客として来て、その時のアンケートにボランティアに参加する意志があることを書いた。

Dさん｜武生市文化センターの職員であるために、自動的に音楽祭の実行委員会にボランティアとして参加している。

* 武生国際音楽祭推進会議の会員（登録 59 名）のうち、７名は武生市文化センターの職員。１名は市役所の職員。音楽祭の事務局が文化センター内に設置されているため、自動的に実行委員会に入ることになる。

2．満足度

Aさん｜これまで続けてきたのは、抱えている問題以上に魅力があったからだと思

う。歯科医以外のネットワークができる、具体的には音楽祭実行委員会の名刺を持っていけば、歯科医をしていては会うことのない人にも会うことができる。

- 人生で、音楽祭をやらなかったらできなかったこと、経験できなかったことは仕事の何十倍もある。これを経験しない人生はもったいない。自分の利益ではないことにどんどん参加することで、それが結局は自分の得になる。満足度としてはこのように考えている。
- 一方では、理事を務めていることで多方面に義理ができる。理事の最大の責任は赤字の負担。“音楽祭の傘になれ”と言われている。理事はまず年間5000円を支払う。その他にアーティストや関係者の接待もする、チケットも売るという大変な役目を担っている。広告一頁10万円の協賛金集めもするし、自らも協賛金を出す。
- 理事長も、音楽祭を通して知り合った武満さんや秋山さんとの出会いをとても重要だと思っている。また、70歳をすぎて40歳も年のはなれた他のボランティアメンバーの人たちと交流できることも非常に大切に思っている。ボランティアの中は非常に民主的で、理事長ダカラという特別なものはない。ただ一方では、民主的すぎて芸術監督に対してもウンと言わない場合もある。
- 文化センターに音楽祭の事務局があるため、センターのスタッフの仕事の質としてもレベルはあがっていると思う。武生市規模の街で諸外国との大使館とも仕事をするようになるし、外国人もたくさんくるので必要に迫られて英語を話すようになるなど、刺激が多い。
- 行政は、やる気のある市民を使ってお金がなくてもできることをさまざまに行えば良い。
- 現状では行政に対する不満はある。今までの官僚は「これまで何をやってきたか」が重要。行政改革は民間人をいかに使えるかで違ってくる。

Bさん｜文化センターのこの部屋で音楽祭の話や武生の街づくりの話をしている時間は非常に充実している。その時間を自宅でテレビを見て過ごすこととの違いを長期的に考えれば随分の差が出てくると思う。

- ボランティアはある意味では民主的だが、民主的すぎて作業が進まないと思うことはよくある。広告もコンセプトにあわないところからはもらっていない。行政からの補助金も1割で良いと考えている。行政には文化センターの提供など補助金以上にできることがあると思っている。

Cさん｜演奏家の人達と実際に話ができたり、年齢層の違う人達ともネットワークが広がる点は満足しているが、話し合いによる意志決定を重視しているため、作業の進行自体が遅いと感じることはある。

Dさん｜立場の割り切りが難しい。特に音楽祭の事務局が文化センターにあるために、作業の切り分けも難しい。以前に一度文化センターの職場を離れた時には音楽祭のボランティアは継続しなかった。今の立場は純粋な意味でのボランティアではない。

3．施設側への要望・課題等

Ａさん｜行政が負担をして有償ボランティアを採用すると官主導になってしまうので、経費は民間である我々が負担する。但し、音楽祭の基本的な事務局機能として、特に音楽祭機関前は専任のスタッフが必要となる。この人件費だけでも行政が負担してくれると、コストもさることながら、行政とのパイプ役として働くことも期待できる。

- 文化センターをボランティアだけが使える場所にするのではなく、市民誰もがそこを利用するような状況になって欲しい。
- 今後は、武生に来た人やアーティストがどんどん世界中に広がって行けばと思う。音楽祭としては第10回まではこぎつけたい。第５回を開催した時に次の５回のことを考えたように、第10回以降20回までは、新しい形での展開をして行けば良いと思う。
- また、ＮＰＯ（非営利団体）の法人化も非常に重要である。淡々と仕事をこなす行政と一気に盛り上がる街のアンチャンとのエネルギーがつながれば、必ず相乗効果が期待できる。音楽人口という意味では、7万人の都市で音楽祭開催中1万5千人が来ればマキシマムだと思う。来年、福井県立の音楽堂ができるので、競合するかもしれない。街づくりの運動体としては10万人規模が丁度良いと思う。地方都市が生き残るのは、マイナスの財産をいかに使うかしかない。

Ｂさん｜まとめ役のＡさんがいなくてもできるシステムづくりが必要。現在はＡさんの献身に随分助けられてしまっている。

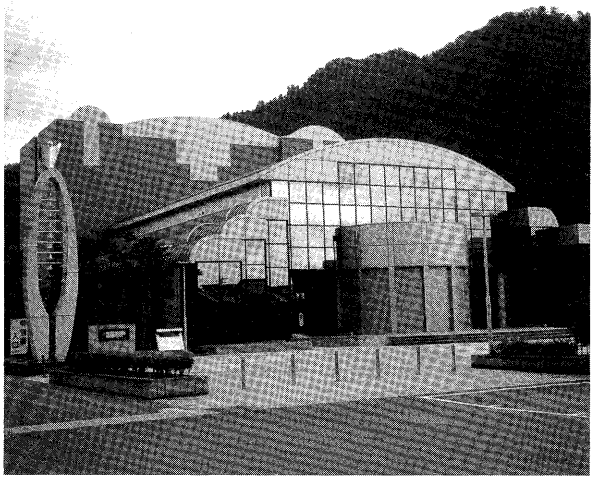
－以上－

Ⅳ. いまだて芸術館

住民が企画立案から運営までを行う「企画プロデューサー委嘱システム」と、舞台･音響･照明等のスタッフを委嘱する「技術（ＡＥ:アシスタント･エンジニア）スタッフ委嘱システム」の２本立てでボランティアを採用。1991 年の開館当初からの採用で、ボランティア・システムとしては先駆的な事例。

施設･運営の概要

運営母体	今立町・いまだて芸術館事業協会
所在地	福井県今立郡今立町粟田部 11-1-1
TEL	0778-42-2700
FAX	0778-42-2828
開館年月	1991 年 11 月
複合形態	単独館
施設特性	多目的ホール
座席数	600
自主事業予算	年間 3,000 万円
自主事業数	年間 35 本（平成七年度）
立地都市人口	14,859 人
組織体制	7 名（名誉館長 1、館長 1、副館長 1、職員 4）



ボランティア制度の概要

名　称	•企画プロデューサー委嘱システム •技術（ＡＥ:アシスタント･エンジニア）スタッフ委嘱システム
導入時期	•開館当初から
登録人数	•プロデューサーは現在企画数分の15名。但し、各企画に関わる延べ人数は200名程度。 •ＡＥスタッフは現在15名。
導入の経緯	•住民参加型の施設運営を目指した町長および初代館長の川津氏の発案。 •ＡＥスタッフは当初、ホールの柿落としを契機に募集された町民劇団「綺羅星座（きらぼし）」の技術スタッフとして募集され、開館後に追加募集をしている。
活動内容	•企画･制作、広報･宣伝、舞台･音響･照明、受付･案内
募集方法	•プロデューサーは、所定の申込書で企画書を提出。採用されれば芸術館の自主事業として位置づけられる。募集は随時。広報誌等に募集記事を掲載（町の広報、芸術館の広報(アートホール31)）。 •ＡＥスタッフについては前述のとおり。
研修	•ＡＥスタッフの技術研修は時々実施（館内研修、館外研修(視察交流)）。先輩が新人に伝授する形を採っている。
実費支給	•ＡＥスタッフのみ１事業の活動に対して5,000円（昼食代含む）を支給。
その他	•開館当初と比較してボランティアスタッフが増加していない点が課題。新メンバーを育成する必要がある。 •町民の中にはまだ一度も芸術館に足を運んだ事のない人もいる。広く町民に芸術館の活動を浸透させたい。

■ いまだて芸術館

施設側インタビュー記録

1．施設運営のしくみ

(1) 運営の基本的な考え方

- いまだて芸術館の愛称は「アートホール31」。公募で決定した。
- 正倉院に残っている越前和紙は千年以上も昔のもの。いまだて芸術館も、千年先を見つめた活動を目指している。“31世紀の未来を見つめ「自然と人間との共存」と「住民主体の企画運営」”がテーマ。
- メジャーなもの、客寄せパンダ的なもの、打ち上げ花火的な催しはやらない、というポリシーを持っている。しかし、住民の中には、まだ芸術館に来られたことのない人もおられる。
- そこでみんなが身近にとらえることのできるお笑い文化を街づくりに活かそうと、実行委員が「吉本お笑いいまだて道場」という催しを開催した。人が入るものや芸術的な専門性の高いもの、という発想ではなく町民にとって良いモノであれば良いという発想。

(2) 組織・財政

- いまだて芸術館の運営母体は、いまだて芸術館事業協会。
- いまだて芸術館は年間の全体予算5,000万円。事業費3,000万円と管理費が2,000万円。
- 予算の流れとしては、今立町が財団法人伊万太千（パピルス館、和紙の里会館、公園、スポーツ関係施設、キャンプ場などを管轄している）を経由していまだて芸術館事業協会へ補助金を出している。事業協会はいわば3,000万円の予算の受け皿。公演や展示をするアーティストは、このいまだて芸術館事業協会との契約となる。
- いまだて芸術館の所管は教育委員会。職員は今立町教育委員会からの派遣。名誉館長と館長は財団の嘱託。

(3) 事業内容（昨年度）

- 事業内容はさまざまで、毎年開催している今立現代美術紙展、第九演奏会のほかに町民演劇「綺羅星座（きらぼしざ）」の公演など。綺羅星座、第九などには町長も参加している。その他には、沖縄の音楽（ネーネーズ）、親子のコンサート、ふるさとキャラバン、音楽座、サンデー・ナイト・ワールドミュージック・コンサート、シネフォリ、おわらい寄席、など。
- 昨年度の自主事業は35本、貸館事業が34本で、計69事業を実施している。
- 映画のプログラムでは観客が３人ということもあった。たとえ観客が３人でも、その３人にきちんと意図が伝えられるような企画であれば、彼等が周囲に広めてくれるはず。観客が少なくてもきちんと伝えることを考えたい。

- 人口15,000人に対してホールの席数は600席。メジャーなものや親子を対象にした企画をすれば600席をうめることは難しくない。
- 集客で判断しがちだが、町には15,000人がたえずいる、文化はたえず町の中にいると考えている。文化で最も重要なことは伝えること。

(4) 館長に川津祐介氏を迎えたきっかけ

- 柿落としの劇の座長を依頼した。柿落としの後、館長に就任していただいた。佐々木小次郎のシナリオは川津氏が書くことになった。
- 綺羅星座は開館の半年前頃に結成された。団員は150名（当日の参加者も入れれば600名が参加）。最初は演劇の稽古らしい稽古はほとんどしなかった。川津さんが、とにかく団員に生き生きしてもらうことを最優先し、みんなのささやかなことをとにかく誉めてくれた。
- シナリオや台詞が決まったのは二カ月前になってからで、3日前にやっと立ち稽古を行った。背景も150人みんなで描いた。
- 川津さんは自主事業の内容にも目を通す。現在は月に１回程度の来館。名誉館長。

2．ボランティア制度のしくみ

- ボランティア・スタッフは主に企画運営スタッフ（企画プロデューサー）と技術スタッフ（ＡＥ:アシスタント・エンジニア）に分けられる。このような住民参加のシステムはもともと町長や川津さんの発案。
- 「何をやりたいか」というよりも「町をどうしたいか」「町の人にこんな事に気付いてほしい」という思いを重視している。

(1) 企画プロデューサー・システム

- 企画プロデューサーについては、先ず企画提案書を提出してもらう。初めての人でも電話で問い合わせさえしてくれれば申込書を郵送する。提出した企画が選ばれれば、芸術館の自主事業として採用される。年間いつでも随時受け付け。芸術館の広報誌（アートホール31）などに募集記事を掲載している。
- 企画を提案した人は、プロデューサーに任命される。自分の企画を実現するために、みんな口コミで集まってくる。
- 企画によって提案から実現までの期間もマチマチ。企画者の気持ちや思いが継続することを重視している。
- 各々の企画に関わる人は延べ200名程度。一つの企画にはプロデューサーを中心に10数名が平均して関与している。
- 年齢層は企画によってさまざま。アースデイは青年層が多い。性別では男性：女性が７：３くらい。

(2) ＡＥ:アシスタント・エンジニア

- 綺羅星座の技術スタッフとしてかかわった人がＡＥスタッフの母体になった。次の年にＡＥスタッフを募集した。

- ＡＥスタッフは現在15名。技術職だけに、個々人の技能に差が出てくるのが課題といえば課題。土曜日の仕込みと日曜日の本番で5,000円（食事代含む）の有償ボランティアとしている。ただ、スタッフ達はグループ全体の積立にしている。
- 芸術館の自主事業だけでなく、貸館事業の時にも出勤する。
- ＡＥスタッフには全員保険を掛けている。職員に掛けているものと同じで、非常勤公務員災害補償制度（損保）というもの。責任は館側にあるので、ＡＥスタッフが働く時には館側のスタッフも必ず付くようにしている。
- 企画プロデューサーはＡＥスタッフの例会に出席して、企画内容を説明し、技術的にサポートして欲しい部分を依頼する。
- ＡＥスタッフに技術的な個人差が出て、それまでの人間関係が壊れることを川津さんは懸念していた。今は先輩が新人に伝授する形での研修が行われている。新しいスタッフには貸し館事業や発表会など高度な技術を要求されないものから初めてもらい、ＡＥスタッフが指導をする。

３．現在の課題と今後の可能性

- 現在、いまだて芸術館が抱えている問題としては、以下の点が指摘できる。

①開館当初と比較してボランティア・スタッフが増加していない点。新しいメンバーを育成する必要がある。

②町民の中には、また芸術館に足を運んだことのない人もいる。待っている行政ではなく、町に出かけていき、町民に対して広く働きかけをしたい。

③ＡＥスタッフと企画プロデューサー・スタッフのドッキング。相互のコミュニケーションをもっと図りたい。

④町民の思いを先行･優先したいと言いつつも、継続することが半ば義務感になりつつある。各グループのねらいを確認しながら継続すべき。

－以上－

いまだて芸術館・企画提案書

文化芸術活動を通じて、いまだて芸術館のテーマである『地域の人々が主人公』と『人と人とが支え合い、自然の中で育み合い、人と自然を大切にした地域づくり』をすすめるため、この企画を提案します。

企画アシスタントプロデューサー			
氏　名		電話＆ＦＡＸ	
住　所	〒		

1. この企画のねらいについて

（1）あなたはなぜこの企画を提案されますか？

（2）この企画の地域に対する広がりをどう考えますか？

2. この企画の提案と今後の展望を聞かせてください。

3. この企画の実現に向けて、実施のための仲間づくりをどう考えていますか？

4. 企画（案）

（1）内　　容

（2）開催場所（利用場所）

（3）予定の日時・期間

（4）予算（案）

○収　入　　円（千円単位）

チケット収入	
協賛金（広告＆助成金）	
その他	
計	

○支　出

出演謝礼		
交通費		
宿泊費		
食　費		
広報費	ポスター チラシ チケット マスコミＰＲ	
舞台関係費	照　明 音　響 舞台美術	
記録費	写真・ビデオ	
計		

☺ ボランティア・インタビュー記録 ☺

Aさん	Hさん（結村構想研究会）
Bさん（綺羅星座、表現教室）	Iさん
Cさん（綺羅星座、表現教室）	Jさん（いまだて紙展事務局）
Dさん	Kさん（福井合奏団、教員）
Eさん（映画サークル・シネホリ事務局）	Lさん（綺羅星座）
Fさん（アシスタント・エンジニア）	Mさん（いのちと文明フォーラム）
Gさん（いまだて紙展事務局長）	Nさん（シネフォリ）

1．参加の動機

Cさん｜きらぼし座に入る以前から音訳グループ「いまだて」という視覚障害者のための朗読をする会に入っていた。芸術館は思いを訴えれば汲み上げてくれるところだと思う。高齢者が“私がいなければできない”と思う機会を与えられるのは芝居が良い。

Dさん｜もともと芝居が好きだった。芝居を芸術館でできる、自分の夢の実現がここでできると思って応募した。他の公共ホールを使用したり自分たちだけで運営するのはリスクが大きすぎる。自分達の芝居だけでなく、福井のアマチュア劇団を呼んだり、自ら照明操作を担当したりして、自分に活力を与えている。

Eさん｜以前に芸術館の職員をしていた先輩に誘われたのがきっかけ。個人的には「街づくり」に興味があった。ハード面ではなく人間的なつながりが重要なのだろう、ということは感じていた。

Fさん｜アシスタント・エンジニアをやっている。もともと高校演劇をやっていて、多少の知識はあった。芸術館で「綺羅星座」の柿落としの時に芝居に必要な設備をそろえてくれるように頼んだ。

＊芸術館側としては、高価で使用頻度の低いものはレンタルで対応している。

- 技術系のスタッフは、①業者委託、②職員を整備するという方法以外として、③ボランティアによる運営が考えられる。

Iさん｜やってみたいことに行政がお金を出してくれることに対する興味を感じた。スチールドラムのワークショップなどは、子供達が何かを通して生き生きと活動するために企画をした。

Kさん｜福井合奏団の公演を担当（30名程度）。南越中学校で音楽教師をしている。ポップス系に偏りがちな子供達や町民にクラシックの体験を深めさせたいと思った。また、中学校を卒業したあとも楽器に関わりたいという子供達も育って来た。福井合奏団に中学校の吹奏楽団も賛助出演している。

Mさん｜「いのちと文明フォーラム」という討論会を企画している。昔から環境問題には興味があった。丁度自分自身の生き方に疑問を持ち始めていた頃に、武生市の太鼓（はぐるま太鼓）のグループの記事を読んで子供達を温かい目で育てていることに感動した。直接話を聞きに行って、自分でも何かやってみたいと思った。「何のためにするのか」が明確にならないと芸術館での企画は通らない。企画のテーマは『許す』。自分を許すことを学んだ

と思う。自分でやりたいことがあって、それが社会のためになればここは何でもやらせてくれる。

Nさん｜映画が好き。映画サークル名の『シネフォリ』とは「映画バカ」のこと。上映の中心は日本映画。文化庁から出ている優秀映画鑑賞事業に指定されたものもある。今立に映画館はない。“フィルム”がアナログだという見られ方もあるが、映画製作の素晴らしさを伝えたいと思っている。

2．満足度

Bさん｜青年団に所属している時にやっていた芝居をもう一度やりたいと思って「綺羅星座」に入った。丁度、精神的に落ち込んでいた時だったが芝居をやったお陰で仕事も定年まで勤め上げることができた。

- 川津館長の「世の中は演劇です。社長も会長も一時的なキャストです。今の仕事を一生懸命やれば良いんです。」という言葉は落ち込みから脱するきっかけとなった。芝居を通して友人ができ、心の内を裸にして自分自身に素直になれる場所を得た感じがする。
- ボランティアというと「自己犠牲」という感があるが、自分のやりたいことをやって自分自身を幸福にすることが大切。それがたまたま社会の役に立てばなお良いという感じ。

Gさん｜いまだて紙展の事務局を務めている。事務局は13名。満足度は50%。

- 全国各地あるいは海外からアーティストなど来客が来た時の事後処理が大変。作家も個性があって難しいし、個々の作家からの要求や期待への対応も難しい。紙展の規模が大きくなるにつれて難題も拡がる。
- 一方、プラスであると思える部分は、サントリー地域文化賞を受賞したことや、他の地域の作家との交流が生まれることで、いまだて以外の地域の情報を得ることができる点。
- 公募展は隔年開催。その間の年はより実験的・ワークショップ的な活動をしている。運営方針全体として少し壁にぶつかっている時期だと思う。

Hさん｜学生のころから反体制運動に携わってきた。芸術館には義理で見に来たことはあったが、自分で何かをする時間はないと思っていた。副館長に「環境と芸術は一体のものだ。」と言われたのがきっかけ。結い村構想研究会に参加できて、これまで個人でしてきた活動が拡がった。

Jさん｜いまだて現代美術紙展に、いまだて芸術館ができる前から17年ほどかかわっている。国際的な作家も招聘できるような空間づくり・場づくりを考え、美術を中心にした芸術村を目指していた。当時はなかなか理解されず、他の活動を通して資金を集め、紙展の活動を重ねて来た。

- 自分の目標から言うと満足度は60%。「生きること自体が芸術」ということを人に伝えたい。

Lさん｜「生まれてきて良かった。出会えて良かった。生きていて良かった。」という目標や、「きらぼし座の運営は“損取りゲーム”。人のことをどれだけ考えられるか、それがきらぼし座の原点だ。」という話など、川津さんや「きらぼし座」との出会いに感動があった。

- 一般的には町長と直接言葉を交わしたりするのは難しいが、町長も「きらぼし座」に入っていて、社会的な役職・地位に関係なく自分が一人の人間になった時に何を感じるかを考えるようになり、その体験が大きな収得だった。そういう活動を世界に向けて発信したい。
- 満足度は100%。今では表現教室や音響にも関わるようになった。

3．施設側への要望・課題、その他

Jさん｜人事異動で担当者が変わると人間関係の蓄積が失われる。音楽・演劇・美術の各々の専門知識を持った担当者が芸術館のプロパー職員としているのが理想的。職員は異動してしまう。

- 芸術館に隣接して図書館もあるが、芸術館もさまざまな情報や活動のセンター的なものであって欲しいので、芸術関係の情報や資料をもっと充実させて欲しい。
- 人との交流が生まれることは良いが、そこから次のステップへと前進するような考え方が欲しい。
- 町民以外の人が芸術館を使い始めると、責任関係が曖昧になる場面が生まれてくる。そこを明確にして欲しい。

Iさん｜技術スタッフの技術向上などをめざし、研修等を積極的に受講させて欲しい。一つが終わった後、次のステップに引っ張るシステムが館側で整備されていない。

- 町の人々から我々の活動やそのシステムが支持されていないと、継続できない。

Fさん｜アシスタント・エンジニアは、館側の担当者の了解がなければホールの機材を自由に使えないしくみになっている。機材の管理上の都合そうなることはやむを得ないと思うが、逆に異動してくる職員の人にもっと知識や経験があって欲しい。

- 地元の若者がもっと出入りするようにする工夫が必要。
- 人口数万のこの町では、施設の利用率から見てもある程度飽和状態になっているのかもしれない。長期的な視野をもって運営する必要がある。

－以上－

V. 大阪府立青少年会館・プラネットステーション

大阪府立青少年会館では、青少年の文化活動の拠点施設として平成 2 年に「プラネット・ステーション」を建設。そこで行われる主催事業は、青少年の手によって企画・運営されるもので、その運営に「イベントすたっふ」というボランティア制度が導入されている。ボランティアというより、青少年が主体になった事業を組み立てることによって、青少年の健全育成を図ることに主眼が置かれている。

施設・運営の概要

運営母体	(財)大阪府青少年活動財団
所在地	大阪市中央区森ノ宮中央 2-13-33
TEL	06-942-5146
FAX	06-942-2448
開館年月	1965 年 4 月(ﾌﾟﾗﾈｯﾄ・ｽﾃｰｼｮﾝ1990 年 12 月)
複合形態	複合館(ギャラリー併設)
施設特性	多目的
座席数	文化ﾎｰﾙ：1,200／ﾌﾟﾗﾈｯﾄﾎｰﾙ：140
自主事業予算	年間 1,000～3,000 万円
自主事業数	年間 15 本（平成八年度）
立地都市人口	2,599,642 人（大阪市）
組織体制	総務系:11、企画系:4、技術系:14、計 29 (青少年会館全体)

ボランティア制度の概要

名　称	•イベントすたっふ
導入時期	•1994.12
登録人数	•168名
導入の経緯	•主催事業は青少年の企画提案に基づいて、青少年のプロデューサーにより実施しており、その運営業務そのものも青少年の手に委ねて実施するためにボランティア制度を導入。
活動内容	•企画提案、受付・場内整理・観客誘導、舞台・音響・照明の補助
募集方法	•主催事業の企画を募集し、採用された企画の提案者が「チーフすたっふ」となる。その企画内容に基づいて「イベントすたっふ」を募集。
研修	•技術講座（6コース）。
実費支給	•予算の範囲内で活動費（交通費相当）を支給。
その他	•主催事業は、大阪府が総合プロデューサーに委託して実施している。委託先から派遣する形で、イベントすたっふのまとめ役として制作チーフを1名置いている。 •企画の内容に関して、もっとオモシロイ、若者らしい“やんちゃ”なものが出てきてほしい。

施設側インタビュー記録

1. プラネット・ステーション設立の目的と運営

- プラネット・ステーションは、青少年の文化活動の拠点施設として、建設費8億、設備費3億で、平成2年12月に青少年会館小ホールの跡地に建設された。
- 府立青少年会館には、1,200席の多目的ホールの他に、複数の会議室やグループ活動室があり、演劇の練習に最も多く使われている。現在約200の劇団が登録しており、会議室が満室のときなどは、屋外の広場（ヤングスクエア）で発声練習をしたりするグループもある。
- 青少年を対象とした主催事業の技術サポートはボランティアのイベントすたっふが行っている。ただし、使用料を取る貸し館事業の場合は、専門のスタッフからなるホール課（5名）が対応している。
- 主催事業の場合でも、当然ホール課のスタッフが、状況によってはイベントすたっふにアドバイスをする。
- 施設の中の機器類は、基本的に自由にさわれるようなしくみを取っている。
- 現在の稼働率は、ホールが約90%、スタジオが60～70%。
- プラネット・ステーションの年間事業費は、府からの委託料と補助金をあわせて約2,000万円。

2. ボランティア制度導入の経緯

- 主催事業は、若者のための若者のイベントを基本としており、大阪府が総合プロデューサーに業務委託して実施している。
- 開館当初は、その総合プロデューサーを経由して若手プロデューサーを募集して、5名（10代2名、20代3名）を起用し、各主催事業を実施していた。
- 事業を実施する際、プロデューサーが若手であること、また、扇町ミュージアムスクエアで若者を対象に実施したアンケートによると、若者の多くに、劇場やホールの舞台設備の技術操作、裏方さんに興味があることが明らかになったことから、運営メンバーとして、ボランティアのイベントすたっふを募集することになった（平成3年8月）。
- 青少年の健全な自己実現の場として、ボランティアの経験を提供することは意味のあることだと思う。

3. プラネットステーションとボランティア

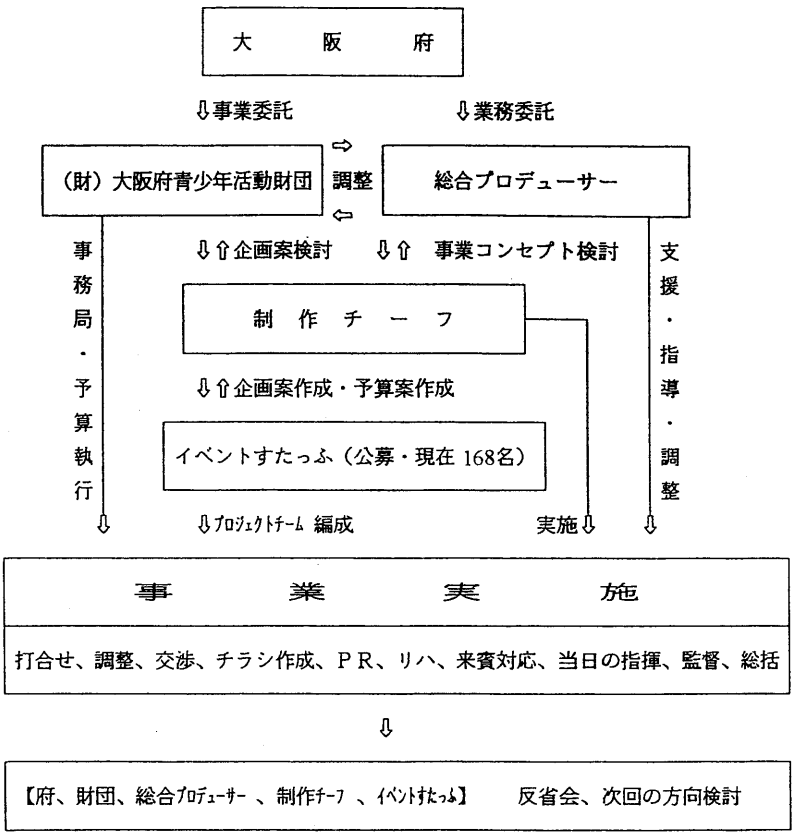
(1) プロデューサーとボランティアの役割

- 最初は総合プロデューサーが核になって事業を実施していた。翌年になって新たな若手プロデューサーを公募して事業を実施したところ、企画の立案が義務化してしまったこと、イベントすたっふの方が実績があってプロ

デューサーとの役割が逆転してしまったことなどがあり、必ずしもうまくいかなかった。

- そこで、イベントすたっふの中から各事業ごとのプロデューサー役となる「チーフすたっふ」を選び出し、他のイベントすたっふが事業の制作・運営をサポートするという方式に変更した（平成6年12月）。
- 平成8年度のプラネット・ステーションの主催事業は別紙のとおりである。このうち、最も大きな催しは毎年夏に行われる「プラネット・フェスティバル」と高校生のアマチュア演劇公演「プラネット演劇祭」で、どちらも100名程度のイベントスタッフが関わっている。
- 基本的にはやりたいことをやってもらうようにしているが、企画の実現に向けて糸口を見つけるなど手助けをすることもある。
- 企画の立案から当日の運営までは、基本的にイベントすたっふに任せているが、事業の実施に伴う予算経理上の手続きは館側の職員が対応。

● プラネット・ステーション　プロデューサーシステム



■ *大阪府立青少年会館／プラネット・ステーション*

● 参考：平成８年度　プラネット・ステーション主催事業　イベントメニュー一覧表

イベント名		実施予定日 （仕込み、バラシ含む）	内　容
プラネット・フェスティバル （演劇、音楽、アート）		8/3(土)～4(日)	プラネット・ステーション全館を使って多様なイベントを展開し、幅広く交流する場とする。
演劇	HOSANNA	11/16(土)～17(日)	「HOSANNA」を主人公とした演劇で、プラネット・プロデュース公演とする。
	プラネット演劇祭'97	3/21(金)～23(日)	ややもすればコンクールを意識しがちな高校演劇に自由な演技ができる場を提供する。
プラネット・ジャム '96		12/14(土)	一般公募のアマチュアミュージシャンとプロミュージシャンの共演
映画	映像ワークショップ	6/23(日)、30(日)、7/21(日)	ビデオ撮影・編集などのノウハウを実践を交えて指導
	プラネット映画祭 '97	2/15(土)～16(日)	公募した自主製作映画とプラネット・プロデュース作品を上映
アート	THE WALL ART	9/2(月)～10/16(水)	会館防音壁の壁面を利用してアートを制作する。
	オムニバスアート	9/15(日)～30(月)	美術展終了後の不要となった材料を使ったアート展
技術講座	基礎編	5/18(土)～19(日)	照明・音響・舞台の初歩的技術講座
	中級編	1/31(金)～2/1(土)	同　中級講座
	プラネット・テクニカル・スクール	6/10(月)、6/24(月)、7/15(月)、8/1(木)、9/12(木)、9/26(木)、9/30(月)、10/5(土)、10/6(日)	照明・音響・舞台効果の実践の場
プラネット年鑑		3月末日発行目標	平成 8 年度イベントの集大成の編集
日活浪漫劇場公演		10/19(土)～20(日)	プロ演劇
おかげ様ブラザーズ公演		12/15(日)	プロ音楽
演劇ワークショップ		9/21(土)～22(日)	
音楽ワークショップ		2/2(日)	

(2) 運営方法等

① 募集方法等

- まず、企画を募集し（多いときは30～40件の提案がある）、それに基づいてイベントすたっふを募集し、説明会を開催する（年1回）。
- イベントすたっふは基本的に応募者全員（30歳までの青少年）を受け付けており、現在168名が登録している。1回のイベントに協力するスタッフはイベントの規模によるが、20～100名程度。
- チーフすたっふがイベントすたっふとして仲間を連れてくるときもある。
- イベントすたっふには、予算の範囲内で活動費（交通費相当）を支給しているが、わずかであり本人の持ち出しとなっているのが現状。また、必要に応じて、昼夕の弁当を提供しているが、あとは無報酬。

② 運営

- 現在、イベントすたっふのまとめ役として制作チーフを1名置いており、イベント実施のための調整とともに、イベントすたっふの相談役としてプラネット・ステーションに常駐している。
- 具体的には、府の青少年課から㈱セカンドプロデュースに対して総合プロデューサーの業務委託を行い、㈱セカンドプロデュースから派遣されている。
- ボランティアの保険については、イベント保険に加入している。各イベント20名の補償に対応できる保険である。

4. 現在の課題と今後の方向性

- 企画の内容に関して、館側の“大人”が思うほど斬新な企画やアイデアが出てこない。もっとオモシロイ、若者らしい“やんちゃ”なものが出てきてもいいと思っている。
- イベントすたっふについては、もっと気楽にやって欲しい。例えば、具体的な用事がなくても気軽にプラネット・ステーションに顔を出すとか。
- イベントすたっふのたまり場として「プロデューサー・ルーム」を設けているが、そのことで逆に閉鎖的になったり、身内化してしまう危険性もある。
- プラネット・ステーションの自主事業としてイベントすたっふが何をやっているかが伝わりにくいので、インフォメーション機能を強化してほしいとの意見が強い。
- 現在のイベントすたっふは、館の自主事業にしか関わっていないが、ホールの運営全体に関与させてはどうかという意見もある。
- ただ、現在のイベントすたっふが一般の公演をサポートすることは、技術レベルと館としての責任の問題から難しい。借りる側にとってもあまりあてにできない。
- イベントすたっふの方から自主的に手伝いを申し出た例や、借りる側から手伝って欲しいという要望が出されたことはある。

■ *大阪府立青少年会館／プラネット・ステーション*

- 現在、外部への貸しホールに関しては、ホール課のスタッフが対応している。

－以上－

☺ ボランティア・インタビュー記録 ☺

Aさん（プラネット・ステーション・制作チーフ）
　　イベントすたっふのアドバイザー兼まとめ役。また、文化課とスタッフの橋渡し役でもある。）
Bさん（今回のプラネットフェスティバルの舞台監督、大阪芸大学生）
Cさん（今回のプラネットフェスティバルの照明チーフ、劇団にも所属、役者）
Dさん（今回のプラネットフェスティバルの受付）
Eさん（今回のプラネットフェスティバルのコスチューム担当、アルバイト）
Fさん（今回のプラネットフェスティバルの企画「人」担当、専門学校生）

1．参加の動機

Aさん｜音楽活動をしていたことから、舞台裏の仕事に興味を持ち、関連する講座を受講した際に総合プロデューサーに誘われた。制作チーフとしての活動歴３年目。

＊プロのミュージシャンであり、芝居もわかる。イベントすたっふ全体のコーディネーションを依頼している。

Bさん｜高校生時代から劇団に属しており、プラネット・ステーションで開催された演劇祭に参加したことがきっかけで、M先輩（高校の先輩、プラネット・ステーションでは２代目の演劇プロデューサー）に誘われた。今年で２年目になる。

＊開館当初のプロデューサー・システムは、公募によって集められた演劇・音楽・美術・映画の各プロデューサー４名を固定し、その企画をボランティアが手伝う、という方式。❶プロデューサーが交替すると、継続しているイベントすたっふの方がプラネットステーションのことを良く知っているという逆転現象が起こる、❷企画が無い時のスタッフ間の情報交流が停止してしまう、などの理由によりこの方式は廃止された。

Cさん｜高校演劇がきっかけ。B さんと同じ時期、M先輩に演劇プロデューサーのアシスタントをやらないかと誘われてイベントすたっふを始めた。活動歴２年目。

Dさん｜もともと芝居をやっていた。M氏に勧誘された。

Eさん｜「ぴあ」でのイベントすたっふ募集記事を見て応募した。活動歴２年目。もともと裏方に興味があり、いくつかの劇団を受けてみたが採用には至っていなかった。始めた当初は何でもやってみたかったので、様々なことに挑戦してみた。衣装には以前から興味があった。

＊希望者は、舞台関係の技術講座を受講できる（一般に公開しているもの）。あとはやりながら覚える。上達すれば別のホールでアルバイトとして働いたり、プラネットから旅立って劇団付きの照明スタッフになった人もいる。

Fさん｜プラネットステーションのテレホンカードを作成した人のチラシを見て、アート関係の友人が欲しくて応募した。去年は美術の装飾関係のスタッフとして活動したが、たまたま「人」という企画が今年のプラネット・フェスティバルのテーマとして採用され、より深く関わるようになった。

2．満足度

Aさん｜イベントすたっふはボランティアなので、結局は学校や会社など生活のメ

インな活動が別にある。そのために、連絡なしに来ない、時間に大幅に遅れる、よって予定していた作業が進まない、などの状況が起こりやすい。現状では、その度に怒っていることもできないので、その状況の中で何ができるかを考えることにしている。

- 各スタッフの担当は、募集をした時の個々人の要望にあわせて割り振っている。

Bさん｜プラネットには芝居がしたいと思って来たが、良い意味で自分が期待していなかった部分、つまり美術や音楽など他の分野に関する知識も得るようになり、面白くなった。プラネットに来ているイベントすたっふで劇団も結成した。

Cさん｜舞台・照明など役者以外のことを学べ、知識が拡がった。“自分の好きなことをやりに来ている”ので、ボランティアという感覚はあまりない。

Dさん｜人間関係に拡がりができたのが良かった。いろいろな分野のことを体験させてもらえる雰囲気があった。プラネット・ステーションは、以前はただの“公共ホール”だったが、今では勝手がわかるようになり“好きなホール”になった。ボランティアという意識は当初からなかった。

Fさん｜考え方が以前より柔軟になったように思う。芝居関係の人達の話も素直に聞けるようになった。

3．活動の頻度

Aさん｜週に5～6日は出勤している。時間帯は昼過ぎから夜閉館まで。この場所に常駐している人が誰かいないと、スタッフがフラッと来館した時に対応できない。特にボランティアが来るのは夕方以降だが、事務局の担当が定時（午後6時）で居なくなる場合があるため、橋渡し役がいないとコミュニケーションが充分にはかれない。

Bさん｜イベント期間中は、毎日足を運ぶ。それ以外でも週1回は顔を出す。夕方来れば、誰かに会える。

Eさん｜アルバイトをしながら、イベントがある時はほぼ毎日、仕事がなくても顔を出している。

4．施設側への要望・課題等

Aさん｜実際、やりたいことがあれば何でもできる場所だと考えている。

- イベントすたっふは、様々な理由で数年で止めてしまい、その後のフォローが難しい。イベントすたっふを支え、バックアップできる体制をつくりたい。イベントすたっふを育てるイベントすたっふが必要。但し、限られた人だけが居心地の良い場所であっても困る。新しく来て新しいことをやってみたい人には、そのチャンスを与えたい。
- プラネットステーションの周辺に食べるところが無いため、遅くまで活動・稽古をしていると不便を感じる。公共ホールであるがゆえに制約もあるが、何とか改善できないかと思う。
- その他、大阪市内の他のホールとの交流もしたい。プラネット・ステーシ

ョン内部の活動が活発なのは良いが、内部だけでかたまっているような印象も持っている。

- イベントすたっふ全般に対しては、とにかく約束を守って欲しい。ボランティアであっても“来る”ことに対する責任感が欲しい。

  ＊イベントすたっふの職業は、1/3 が大学生、1/3 が社会人、1/3 がフリーター

Bさん｜何年か同じスタッフで活動していると、マンネリ化する。常にいろいろ面白い活動をしている人をスタッフに加える努力が必要。

＊イベントすたっふは毎年募集。うち 20%程度が継続。常時活動をしているのは 20 人程度。プログラム単位で活動するが、複数のプログラムに関わる重複スタッフもいる。

- これからは、もっと「芝居」がメジャーになるような活動がしたい。遊びに行くジャンルの中に。映画やスポーツなどと同じ並びで「芝居」に足を運びたくなるような企画をし、そうすることで、プラネットでの活動を広めたい。現状では、プラネットは芝居をやっている人にしか知られていない感がある。

Cさん｜しいて言えば、この先も自分が好きなことをできる場所であって欲しい。

＊イベントすたっふへの参加は口コミが多い。興味本位での参加は長続きしない場合が多い。スタッフの募集はちらしが中心となるが、ラジオ等の広報媒体にお願いすることもある。スタッフ公募の前にまず企画を募集する。

Dさん｜プラネット・フェスティバルは分野を越えたイベントの一つだが、その他は演劇、音楽、美術、映画など分野ごとに活動している。分野を越えたイベントを企画して、プラネット・ステーションの前を歩いているようなサラリーマンにも参加してほしい。このような考え方をするようになったのは、プラネットの影響。

- プラネットホールの利用希望者が多く、抽選で利用日を確保するのが至難の技。個人的にはこの点が改善されると有り難い。
- プラネット・ステーションを発表の場として使用するのは、旗揚げして１～２年の劇団が多い。その他、打ち合わせや稽古場（青少年会館の会議室など）として使っている。劇団関係者の“集合場所”という感じ。「森ノ宮」と言えばプラネットステーションを指す。１階（要予約・パブリックスペースは無料）と２階はフリースペースで自由に使える。青少年会館が使えなければ、外の広場でも稽古をする。

Eさん｜貸し館としての青少年会館も午後９時の閉館までの使用を、せめて 10 時まで延長してもらいたい。

- イベントすたっふとして来る人がだいたいいつも決まっている。継続してスタッフを努める人もいるが、短期間でやめてしまう人も少なくない。“ボランティア”という意識で来ている人は長続きしないような気がする。“好きなことをやらせてもらっている”という意識の人は残っている。あと、ジャンルを融合した活動は、今後の課題だと思う。

Fさん｜「プラネット・ステーション」が一般に知られていない。この場所自体のＰＲを考えて欲しい。個人的には、実際に運営する立場にたって裏の厳しさがわかった。それをふまえて、また企画を出してみたい。

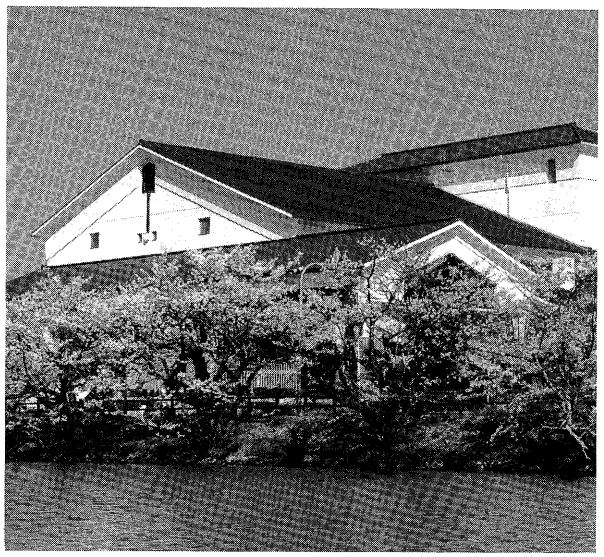
―以上―

Ⅵ. たんば田園交響ホール

裏方業務を担う「ステージ・オペレーター・クラブ」、もぎり、客席案内などなどオモテ方の業務を行なう「レディースi」、女性に期待される企画と観客動員を安定させる方策を諮問している「レディース21委員会」という複数のボランティア制度を導入。様々な角度から地域住民がホールの運営を支える試みで、地域に根ざした公共ホールの運営をめざしている。

施設・運営の概要

運営母体	篠山町
所在地	兵庫県多紀郡篠山町北新町41
TEL	0795-52-3600
FAX	0795-52-3646
開館年月	1988年4月
複合形態	単独館
施設特性	音楽ホール
座席数	800
自主事業予算	年間3,000～5,000万円
自主事業数	年間11本（平成八年度）
立地都市人口	22,590人
組織体制	総務系:2、企画系:1、技術系:3、その他:1（全て自治体職員）



ボランティア制度の概要

名　称	•①：ステージ・オペレータークラブ、②：レディースi（ｱｲ）、③：レディース21
導入時期	•1987.10
登録人数	•①：89名、②：36人、③：21人
導入の経緯	•①：舞台技術に対する知識とノウハウを理解してもらうことを目的に、開館の1年前より養成講座を実施（直接的には技術スタッフの業務委託費用の利用者負担の軽減がきっかけ）。
活動内容	•①：舞台・音響・照明／ボランティア会報誌の発行、②：もぎり・案内・パンフレット配布、③：企画・制作
募集方法	•①～③：新聞等で公募。
研修	•①：養成講座15回／年（現在5期生）。
実費支給	•①：午前/午後/夜間各1コマ1,500円、全日4,500円を交通費と食事代として費用弁償。
その他	•地元のアマチュア文化団体の発表会については、公演内容や演出方法をステージ・オペレーターがアドバイスし、徐々に内容が向上している。 •将来的には、ホールのボランティアが地域コミュニティのコアになってほしい。ボランティア・メンバーがきっかけになって、篠山町では、舞台に立ったことのある人、ホールに来たことのある人の割合は非常に高い。

施設側インタビュー記録

1. 施設全体の運営のしくみ

- たんば田園交響ホールは、広域行政を対象にした兵庫県の県有施設で、県が地元広域行政に運営を委託し、広域行政がさらに篠山（ささやま）町に運営を委託している。
- 建設費（12億）は県が負担し、地元が用地を提供して施設は建設されたが、運営費は100%篠山町が負担。
- 自主事業を含めた年間の総運営費は約1.3億円で、貸ホールや入場料収入を除いた約8,000万円が町の一般財源から支出されている。ちなみに町の一般会計の規模は約90億円で、ほぼ1%に相当。
- 自主事業は年間13～14回程度。
- ホールの運営は、当初は町の教育委員会の管轄だったが、現在は町長部局の課の位置づけ。
- 町の人口は現在22,500人。広域行政の周辺の町を合わせた4町全体では約5万人弱。篠山町の計画人口は2万5千人で、ベッドタウン的な性格の強い町であるが、神戸新聞の調査などでは住みやすい町の上位にランクづけされている。
- 篠山町のイメージづくりにホールは一役買っており、隣接する公共施設や観光ホテルの外観は、ホールのデザインの“なまこ壁”に統一されている。

2. ステージ・オペレータークラブ

(1) ボランティア導入の経緯

- 1987年度に建物を建設、同時にオペレーター養成講座を開設し、その修了生で翌年の88年からステージオペレータークラブというボランティア・スタッフを導入しており、今年で9年目。
- 当初は、舞台・音響・照明等の運営は、関西方面の専門業者に委託することを検討していたが、専門業者と契約すると一人につき1,500万円近い契約金額とさらに一日2万円ぐらいの経費がかかることがわかった。つまりそれでは、1公演当たり、経費だけで30～40万、仕込みも入れると50～60万円の費用がかかってしまうことになる。
- そこで、その経費を節約するために、ボランティアで裏方の業務をやることができないかと考えた。まず、準備室のスタッフがフォークソングをやっていた経験を活かし、そのメンバーが中心になって裏方をボランティアでやっていけないか検討した。
- 新聞で公募したところ60名の応募があり、87年の11月から養成講座を毎週1回、5ヶ月間実施した。
- 県内のホールの照明担当者を講師に招いたり、舞台関係の設備・機器類の

● 第５期ステージオペレーター養成講座カリキュラム

	月　日	曜	講　習　内　容	講　師
1	1・17	火	開講式（舞台をたのしく芸術する）	
2	24	火	舞台概論	出口源市
3	29	日	劇団「四季」篠山公演　視察研修	
4	31	火	照明概論	菟原　功
5	2・7	火	音響概論	小林純一
6	12	日	おじさまの音楽会　視察研修	
7	14	火	舞台技術論	荻野円蔵
8	21	火	舞台技術実習	舞台部ｵﾍﾟﾚｰﾀｰ
9	28	火	照明技術実習	照明部ｵﾍﾟﾚｰﾀｰ
10	3・7	火	音響技術実習	音響部ｵﾍﾟﾚｰﾀｰ
11	14	火	舞台技術実習	舞台部ｵﾍﾟﾚｰﾀｰ
12	21	火	照明技術実習	照明部ｵﾍﾟﾚｰﾀｰ
13	28	火	音響技術実習	音響部ｵﾍﾟﾚｰﾀｰ
14	4・4	火	専門部に別れての懇話会	各部ｵﾍﾟﾚｰﾀｰ
15	9	日	閉講式	各部ｵﾍﾟﾚｰﾀｰ

納入業者による使用方法の説明会を開催したりした。また、オープニング事業では専門業者の神戸国際ステージが入っていたため、ボランティアがその業務の手伝いをさせてもらったりした。

- こうして覚えたノウハウで、地元の人の公演を手伝うというのが、ボランティアの基本的な役割。
- 技術をかわれたボランティアが嘱託職員になり、4年目にホールの正職員として現在の技術担当者を務めている人もいる。

(2) ボランティア制度の概要

- 第1期生は38名。現在5期生までいて登録者数は89名。
- 養成講座は2期生以降も各期15回開催している。
- ボランティアの職業は電気屋、大工、宮司、僧侶、教師、元役者などまちまち。
- 年齢的には、一番若い人が22,3才で最も高齢者は70才近い。男女比はほぼ半々。
- ボランティアの募集は地元ミニコミ誌と一般新聞、町の広報誌で行う。
- ボランティアスタッフの中には、混声合唱団や吹奏楽、ジャズダンス、ママさんコーラスなど自分でも文化活動に取り組んでいる人も多い。
- 業務の内容は、舞台、照明、音響のオペレーションと搬入・搬出で、スタッフ一人当たりの年間平均出役日数は約8日。仕事がなくても、ホールに顔を出す人もおり、実際ホールに来る日数ということになるともっと多い。中には毎日1回は必ず顔を出すという人もいる。

● たんば田園交響ホール　ステージオペレータークラブ　会則（抜粋）

（名称）
第１条　本会は、たんば田園交響ホールステージオペレータークラブ（SOC）と称し、事務局はたんば田園交響ホール（以下「ホール」という）内に置く。
（目的）
第２条　ホールで実施される事業に対して積極的に協力し、ステージオペレーター活動を通じて地域文化の発展に寄与する。又会員相互の交流親睦をはかる。
（事業）
第３条　前条の目的を達成するために、次の事業を行う。
(1) 技術向上のための研修。
(2) ホールにおける文化的行事への参加協力。
(3) 会員親睦会の実施。
(4) その他目的達成に必要な事業。
（会員）
第４条　本会は、原則としてホール主催のステージオペレーター養成講座の参加者で前条の目的に賛同するものをもって会員とする。
－以下省略－

● オペレータークラブ手当等支給規程（抜粋）

第１条　この規程は、会員に関する慶弔又は会員の病気・怪我及びその他に対する手当および研修費等の補助について定めたものである。
第２条　前条に基づく手当及び研修補助については次のとおりとする。
－途中省略－
2　研修費等
(1) 講座等の受講料については 10,000 円を限度とし、交通費のみの場合は 50%を補助する。
(2) 観劇等の視察研修は、1 人年 1 回とし、50%の補助とする。ただし、上限は 1 人 3,000 円とする。
－以下省略－

● オペレータークラブ料金規程

（規程の目的）
第１条　この規程は、オペレーター活動に対して主催者より費用弁償として負担願う金額を定めたものである。
第２条　前条に基づく費用弁償（舞台増員費）は次のとおりとする。
《オペレーター増員費》
午前　9 時～12 時　1,500 円
午後　13 時～17 時　1,500 円
夜間　18 時～22 時　1,500 円
全日　9 時～22 時　4,500 円
《オペレーター増員費》
イスはずし並びにもどし　各 1,000 円
オケピット設営並びに復帰　各 1,500 円
－以下省略－

(3) ボランティアの運営

- 月1回ボランティア部会を開き、主催者から要請のある人数について催し物ごとに手伝う人を調整している。
- ボランティアの業務に従事したときは、「交通費＋食事代」ということで一コマ(9:00～12:00, 13:00～17:00, 18:00～22:00) 1,500円、全日(9:00～22:00) 4,500円が費用弁償として支給される。
- 実際には半年間プールしておき、弁当代を除いた金額をメンバーに支給するしくみになっている。
- 有償ボランティアという言葉もあり、当初からこの費用弁償を行う方式を採用している。当初は一回3,000円だったものが、活動時間がバラバラになることもあって一コマ1,000円になり、他のホールで同様のしくみを導入しているところとの相場との関係もあって、5年目から現在の水準になっている。

● たんば田園交響ホールスケジュール表（1996年9月末～11月）

9月17日現在

月／日	行事名	仕込	リハ	本番	舞台	照明	音響	その他
9／30	ひょうごゆうあい音楽祭	18:00	:	:	2人	2人	3人	人
10／1	〃	:	10:30	13:00	2人	2人	3人	人
／2	ア・ラオペラ椿姫	9:00	15:00	19:00	2人	2人	1人	人
／6	篠山町合併20周年式典	18:00	:	:	2人	2人	2人	人
／7	〃	:	:	9:30	2人	2人	2人	人
／15	木下オータムコンサート	9:00	:	10:00	人	人	1人	人
／18	篠山町戦没者追悼式	13:00	:	:	人	1人	人	人
／19	〃	:	:	10:30	人	1人	人	人
／20	篠山混声合唱団リサイタル	13:00	19:00	:	2人	2人	人	人
／21	〃	:	:	18:00	2人	2人	人	人
／22	篠山中吹奏楽演奏会	9:00	:	13:00	2人	2人	人	人
／25	県中学校長研修会	9:00	:	:	2人	2人	2人	人
／26	〃	:	:	9:00	2人	2人	2人	人
／28	ダンシングパフォーマンス	9:00	13:00	:	3人	4人	1人	人
／29	〃	:	9:00	14:00	3人	4人	1人	人
11／2	幼児のうたまつり	:	:	9:00	人	人	人	人
／3	丹波の森国際音楽祭	:	:	:	人	人	人	人
／4	〃	:	:	:	人	人	人	人
／5	〃	:	:	14:00	人	人	人	人
／8	郡養・小音楽会	:	:	9:30	人	人	人	人
／9	郡中学校音楽弁論大会	18:00	:	:	人	人	人	人
／10	〃	:	:	9:00	人	人	人	人
／11	中村美律子コンサート	9:00	:	14:30	人	人	人	舞人出 各10人
／12	篠山ライオンズ30周年	9:00	10:30	:	2人	2人	2人	人
／15	篠山町消防団同和研修会	18:00	:	19:00	人	人	人	人
／16	丹有高校音楽会	9:00	:	10:00	人	人	人	人
／17	丹有中学校音楽会	9:00	:	10:00	人	人	人	人
／18	メロマン室内管弦楽団	13:00	15:00	19:00	2人	人	人	人
／19	サワヤマピアノ発表会	:	:	10:00	人	人	人	人
／22	町合同芸能発表会	13:00	16:00	:	4人	4人	4人	人
／23	〃	:	:	10:00	4人	4人	4人	人
／25	産業高校吹奏楽演奏会	9:00	10:00	13:00	人	2人	人	人
／26	丹波合唱祭	9:00	:	10:30	人	人	人	人
／		:	:	:	人	人	人	人
／		:	:	:	人	人	人	人

※各部の出役人数は予測ですので変更の場合があります。

- ステージオペレータークラブには会則があり、会費は月500円、年6,000円で、新年会などの親睦会費用に使われている。専門技術を磨くための講座の受講料や技能認定試験などの費用についても、会から補助が出るしくみ。
- 町サイドの管理係の人間が1名ボランティア・クラブの担当者（世話役）となっているが、連絡調整には舞台、照明、音響の担当職員があたる。

3. 現在の課題と今後の方向性

- ボランティアということであまりきつく言うことはできないが、しかし時にはきつく言う必要もあり、その辺の兼ね合いが難しい。
- ボランティアは半ば身内のようになっており、彼らにとってホールは居心地のいい場所になっていると思う。

① ステージ・オペレータークラブ

- 「ステージ・オペレータークラブ」については、このままで継続できると思う。20代、30代にしかできない活動だと先は不安だが、今60歳の人も活動している状況を考えると、先はある。
- これまでにステージオペレーターの養成講座を受講した人は、延べ150人になっている。その人たちは、ある意味で目の肥えた人たちで、そういう人たちが住民とホールの橋渡しをするようになると、観客のレベルも向上すると思う。
- アマチュアの発表会の際、公演の内容等に関してボランティアに相談があることもある。毎年公演をやっているようなところは、年々裏方に対する注文が多くなる。
- プロに委託していたのでは、こういう住民とホールをつなぐコアになれるような人は育ってこなかった。

② レディース21

- 「レディース21」については、企画をするのに企画のことだけを知っているだけでは不十分。舞台の裏のことも知る必要がある。1990年に発足しているので、10年後の2000年には独立した企画集団として、場合によっては住民による“実行委員会”方式の企画・制作を実現してくれれば良いと思う。この形式の活動を定着させたい。

③ 鑑賞型から自主制作へ

- 篠山町民のひとりひとりが必ず一回はボランティア・スタッフとしてホールに関わったことがあるくらいになっても良いと思う。劇場・ホールに対する観客のこれからの関わりは、舞台の“創作”に関わる形になり、“鑑賞型”の時代は終わる。舞台裏の大切さを知っているからこそプロにも感動するし、アマチュアの成長・努力にも感動できる。観客としての関わりだけでは育たない。
- 行政が“自主公演”と称して買い取り公演を提供するだけでは、観客は来ない。住民の企画の方が客は入る。今年もホールの自主企画のうち４つは実行委員会方式。篠山町が委員会に加わっている。

- “参加型”から“参画型”へ。この意味では岸和田方式を目標にしている。
- 「自主制作」も行いたい。住民のなかからプロデューサーを育て、モノもヒトも地域にあるものをプロデュースしたい。これまでの実績では「たんばオペラフェスティバル」で市民参加のオペラを制作してきたが、次はミュージカルをやってみたいと思っている。

④ ボランティアが核になった地域づくり

- ボランティアは行政の補完的な機能を担うのではなく、ボランティアという活動をとおして市民に“生きがい”を与えることだと思う。安上がり行政ではなく、地域を変えていくといった長期的な展望が必要。
- 将来的には、ホールのボランティアが地域コミュニティのコアになっていけばいいと思う。ボランティア・メンバーがきっかけになって、篠山町では、舞台に立ったことのある人、ホールに来たことのある人の割合は非常に高い。

－以上－

☺ ボランティア・インタビュー記録 ☺

Aさん（ステージオペレータークラブ副会長、音響担当、第1期オペレーター養成講座修了）
Bさん（ステージオペレータークラブ、舞台部長、第2期オペレーター養成講座修了）
Cさん（ステージオペレータークラブ、 照明部長、第3期オペレーター養成講座修了）
Dさん（ステージオペレータークラブ照明担当、第1期オペレーター養成講座修了）
Eさん（レディース２１会長）
Fさん（ステージオペレータークラブ音響担当、レディース２１）
Gさん（レディースｉ(受付・案内)）
Hさん（レディースｉ(受付・案内)）

1．参加の動機・きっかけ

Aさん｜音楽が昔から好きだった。養成講座の開催日と会社の休日が重なっていたので参加できた。当初は安易に考えていたが、深く関われば関わるほど難しくなっている。具体的には、ステレオの大きいようなものがあるだけだと思っていたが、実際には高性能のマイクやラインがあり、操作には専門性を要する。ただ一方では、すぐに操作をマスターできる簡単なものであったら長続きしていないと思う。難しくても、それをマスターしたいがために活動を続けてきた。

Bさん｜動機は二つある。ひとつは、日曜大工が好きで、舞台の様々なものを自分で作れると思ったこと、もう一つは、西紀町役場に勤務しているため、篠山町との交流がはかれると思ったこと。活動歴7年目。

Cさん｜ボランティアは4年目、自分で50名程度のダンス・グループのチーフインストラクターをやっており、1年に1回大ホールで発表会を開催している。

- たんば田園交響ホールができる前、市民会館（300席）でダンスの発表会をした。ここの大ホールで2回目の発表会を行ったとき、照明でもう少し青と赤を強く出して欲しいと言ってもわかってもらえなかったのが、ボランティアに参加するきっかけ。
- 最初は、ボランティアで裏方の勉強をして、自分たちの発表会だけうまくいくようになればいいと思っていたが、やりはじめたらボランティアが面白くなってやめられなくなった。

Dさん｜自分で吹奏楽をやっていたため、ボランティアを経験すると自分の出る演奏会でいろいろなことができると思った。

- 以前は豆腐屋をやっていて午後3時には毎日ホールに来ていた。第一期生なので、ホールに出入りするようになって9年目になる。
- プロの歌手に会えるかもしれないというのも参加した動機だったが、実際にやってみて簡単には会えないことがわかった。

Eさん｜平成元年にレディース２１が発足した当時から参加している。参加のきっかけは主人。何かコンサートがあると主人がポケットマネーで２人分のチケットを購入していたので、「ホールで活動したら一人分助かるからやってみろ」というのが最初。

＊「レディース２１」は、女性の目で見た企画をやる、という目的で発足。100企画して10が実現すれば良い方。メンバーは20代から60代までの21人。職種も

いろいろ、ホール運営や企画についての知識もまちまち。

Fさん｜小さいころ東京にいて演劇をやっていた。参加していた劇団が解散し、大阪に転居することになった。それ以降、コンサートに行ったりバンドに参加したりする中で、プロの音響について勉強したいと常々思っていた。縁があって3年前に篠山に来た時に、ステージオペレーター・クラブの存在を知り、第5期の講座を受講した。

- レディース21はこの4月から参加。Eさんに誘われた。発足当初からの人が1/3程度。皆それぞれ知識が豊富で、向上心が高い。

  * レディース21は基本的には2年任期だが、更新可能

Gさん｜会社の先輩に勧誘された。当初は実際の業務として何をやるか良くわからないまま、“有名人に会える”“タダで公演が観られる”という動機で参加することにした。

  * 「レディースi」の制度としてはオープン当初からある。毎年募集している。
  * オペレータークラブ、レディースi、レディース21ともスタッフは全員、どの公演も無料で鑑賞できる。感性の向上のために、観てもらおうとしている。レディース21の人はよく観に来る。

Hさん｜知り合いの人に誘われた。タダで公演を観られる、有名人に会えるという誘い文句に乗った。活動歴2年目。

2．満足度

Bさん｜日曜大工と違い、自分で作ったものが外にでる、みんなで作り上げる、という満足感がある。

Cさん｜実際、自分たちの発表会をやるときも、照明や音響に対して細かな指示ができるようになり、ボランティアをやる前に比べて、照明や音楽とダンスがずっとバランスのとれた公演ができるようになった。

Dさん｜ここで初めて知り合った人もいる。50代や60代の人もいるが、ボランティアには年齢差によるタテ関係がまったくないのも魅力。定年後の人の中には、ここ以外でもボランティアをやっている人もいる。

- ボランティア共済保険に加入しているが、安全面に関しては、日頃から徹底するようにしている。出役の間隔が空くと、機械操作のカンが鈍ることがある。

Eさん｜自分たちが何をしたらよいか、何ができるかという方向性が見えて来るまでが大変だった。ファッションショーは5年間チャレンジした。思考錯誤の末、関西以西でキャパシティのあるホールすべてに電話し、6カ所まで共催者を集めたが、昨年の地震でキャンセルせざるを得なくなった。非常に残念だったが、“やればできる”と思えるようになったし、ネットワークの重要さも学ぶことができた。また、自分が個人になった時には全く不可能なことが、この組織に属していることで可能になることは素晴らしいと思う。

- 感性を研ぎすますことの重要性を知った。感性は自分でいつでも研ぐことができる。

Fさん｜単純に音響のことだけでなく、電気関係のことなど幅広い知識が必要であることを知った。

- また、特にレディース21では、個性の強い人が集まっているが、人間関係がギクシャクすることがあまり無く、お互いに助け合うことができている。

Gさん｜満足している。年１回、受付や案内に関する「講習」を受講でき、他では学べない知識を得ることができた。

Hさん｜クラシックなどそれまで興味のなかったものが段々に好きになり、それが自分のものになりつつあることが一番うれしい。また、礼儀作法も学ぶことができた。

３．活動の頻度

Aさん｜ホールが丁度会社の近くにあり、出役に関係なく、一日に３回くらい顔を出す。

Bさん｜現状では、月１回程度しか参加できていない。従って出役はあまりしていないが、舞台部の役員（部長）を務めている。仕事とボランティアの両立は難しい。スケジュールの調整が難しいので、多様な専門家をそろえておくと良いと思う。

Eさん｜毎月 21 日をレディース２１の例会日にしている。企画が近くなるともっと頻繁に集まる。

Hさん｜レディースｉの出役は２ヶ月に１回程度。

４．施設側への要望･課題等

Bさん｜ボランティアは時間的な制約もあり、結局はプロになりきれない。ボランティアの限界がある。また、参加の頻度や技術の習得速度も個人差があり、技術レベルが均一ではないし、失敗もある（これを許容してくれているホール側に感謝している）。逆にレベルが全員高くなりすぎても新人は入りにくい。

- ホール側スタッフに随分依存していると思う。“お手伝い”という意識をいかに払拭できるかが問題だろう。ボランティアだから失敗しても許されるということはない。誰が舞台を作っていようと観客は同じ金額を払って公演を鑑賞するので、手抜きはできない。
- また、ホール（施設）に属する舞台スタッフの場合、公演ごとに毎回新しい舞台に対峙しなくてはならない点が難しい。劇団に所属する舞台スタッフなら同じ公演を繰り返し行うので進行順はわかっている。

Cさん｜現在はステージ・オペレータの部屋がないため、待ち時間はロビーで待機している。皆で集まれる場所があると良い。

＊改修してボランティア専用の部屋を設ける予定。

- プロの公演で照明等の持ち込み機器があるときは扱いがわかりにくい。うまく対応できなくて、出演者側の担当者からしかられ、悔しい思いをしたこともある。
- ブランクが空くとカンが鈍ることがある。年間10回ぐらいの経験では、技術水準の向上にも限りがある。
- 午前中リハーサル、昼本番というような場合には、スケジュールの調整が

大変。春の田植え時、秋の稲刈り時、また11月の黒豆の収穫時には、人手を確保するのがとくにたいへん。リハーサルと本番で人が違ってしまうこともある。

- ボランティアだからといって甘えたくないし、しっかりとしたプロ意識を持ってやっていけたらいいと思う。

Eさん｜企画もさておき、メンバー自身の繋がりをもっと強くしたい。21人は個人的にはほとんど知らない人同士の集まり。もう少し深いところで知り合って、レディース以外のところでの繋がりも発見したい。

Gさん｜年間12～13本程度の公演について、レディースｉのスタッフ全員で仕事を分担するため、年間の出役数は5回から少ない人は2回程度になってしまう。あまり間隔があくと仕事の勘を忘れてしまう。また、皆女性なので、結婚すると止めてしまうことも課題のひとつか。

Hさん｜レディースｉとして案内用の制服があれば良いと思う。

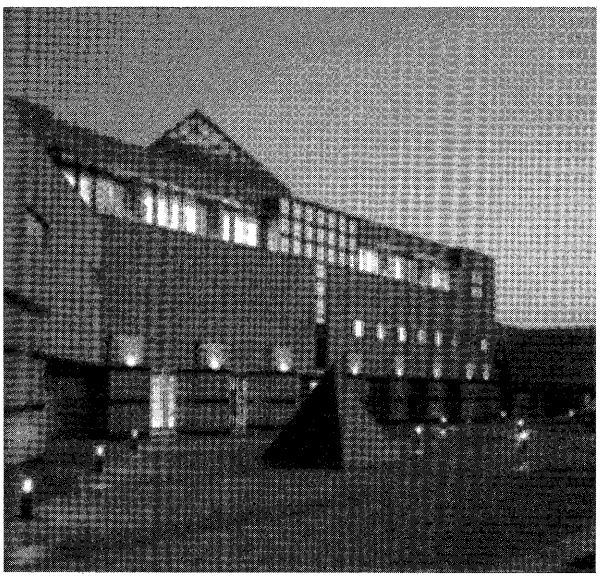
－以上－

Ⅶ. 春日市ふれあい文化センター

春日市ふれあい文化センターは、福岡市のベッドタウンに立地する複合文化施設。青少年を企画面と運営サポートの両面から、施設運営のボランティアとして取り込むことによって、街全体の青少年の活動を活性化させつつ、地域に密着したホール運営の可能性を模索している。

施設・運営の概要

運営母体	(財)春日市文化スポーツ振興公社
所在地	福岡県春日市大谷 6-24
TEL	092-584-3366
FAX	092-501-1669
開館年月	1995 年 4 月
複合形態	複合館（図書館、ホールなど）
施設特性	音楽ホール
座席数	中：600、小：302
自主事業予算	年間 1 億円以上
自主事業数	年間 80～90 本（平成 8 年度）
立地都市人口	約 10 万人（H8.11.）
組織体制	総務系:6、企画系:9、技術系:2、計 17 （技術系 2 は外部委託スタッフ）



ボランティア制度の概要

名　称	•K's Crew（ケイズ・クルー）
導入時期	•1995年3月
登録人数	•40名
導入の経緯	•市民の顔の見える運営を検討する中で、30歳未満を対象にホールの運営に参画してもらうボランティア制度を導入することとなった。
活動内容	•ボランティアの業務の内容は①公演サポートと②企画協力の二つに分けられる。 •企画・制作、広報・宣伝、舞台・音響・照明、受付・案内
募集方法	•センター発行のイベント広報紙によって公募。自分のやっていみたいイベント等の「企画提案書」を出してもらう。ボランティアとしては基本的に応募者全員を採用。
研修	•とくになし。
実費支給	•公演サポートに関してのみ770円／時間を支給。
その他	•企画協力業務は、アコースティック・トークライブ（地元で活躍するアマチュア・ミュージシャンのコンサート）について出演者探しから、当日運営までを全てボランティアでやっている。 •将来的にはボランティアが自主事業を実行委員会形式で実施するような形で機能してほしい。

■ 春日市ふれあい文化センター

施設側インタビュー記録

1. センターの立地環境とボランティア制度導入の経緯

(1) 立地環境

- 春日市の人口は約10万人で増加傾向が続いている。ただし、通常の人口増加のパターンとは大きく異なっており、約4分の1が転出入を繰り返しながら、毎年2～3千人ずつ増加している。これは、福岡への転勤族が多いということ（福岡は支店のまちと言われている）と、自衛隊の駐屯地が２ヶ所あることが影響している。
- そうしたことから、現在の春日市にはいわゆる“地縁”による人々の結びつきが少なく、どこか他の地区で生まれ育った人が多い。市の青年団も30年前になくなったまま。唯一春日市の中心部で、春日の婿押し祭りというものが300年前から続いており、青年の活動が存続しているのみ。
- 福岡市に隣接する春日市は、福岡市のベッドタウン化が進み、市民の顔が見えない町になりつつある。市内の人口は10万人を越え、１学年約1,600人の学生がいるが、昼間にとくに若い男性の姿を見ることがめっきり少なくなってしまった。現在スポーツや文化活動を楽しんでいるのは、年輩の女性が中心である。
- 春日市の青年層は、天神や中州で遊んで、夜遅く帰ってきて寝るだけといった状況になっており、センターの運営に、なんとかこれらの青年層の力を借りたいと考えている。

(2) ボランティア導入の経緯

- センターでは、市民オーケストラや少年少女合唱団など、人づくり、人材育成に力を入れており、ボランティアの K's Crew もその一環と言える。
- センターがオープンしたのは1995年4月1日。ボランティアに関する企画はオープンの前年に検討された。福岡の都心部に近い立地ではあるが、逆に人気のあるアーティストをだれでも呼べるような立地にはないため、半分は貸し館になざるを得ないと考えた。
- 残りの半分を何とかホール側で主体的に運営する方法、しかも市民の顔の見える運営方法を検討する中で、30歳未満を対象に、ホールの運営に参画してもらうボランティア制度を導入することとなった。
- 中年層の女性を対象にしたボランティアについても検討したが、古株がボランティア団体を牛耳ってしまったり、そうなると若い人がセンターの活動を面白くないと感じたりするのではないかという意見も出た。そこで、まず若い人を対象にした現在のボランティアを導入し、それが軌道に乗ってきたら、中年層の女性を対象にしたボランティア組織についてもいずれは検討したいと考えている。

2. ボランティア制度の内容

- ボランティアの位置づけとしては、ホールの運営をサポートするためのボランティアではなく、主体的に事業を企画・運営するボランティアという性格が強いかもしれない。

(1) ボランティア制度の概要

① メンバー構成等

- ボランティアメンバーの数は現在40名で、そのうち常時活動しているメンバーは3分の2前後。男女比は3対7で女性の方が多い。男性メンバーはかなり休眠状態だが、活動には参加しなくてもボランティアメンバーはやめたくないという人が多い。女性はOLが中心、ボランティアを始めてからOLをやめた人が二人いる。
- 電車で片道1時間半もかかるメンバーもおり、熱心にボランティア活動をする姿には、感心している。
- K's Crewという名称は、ボランティアメンバーの議論の中から生まれたもの。スタッフという言葉を使いたくないということで、乗組員を意味するクルーという言葉になった（K'sのKは春日市のという意味）。

② 募集方法

- スタッフの募集は、センターの発行するイベント広報紙に「ふれあい文化センターの事業の企画や運営をサポートする方としてボランティアを募集します」といった趣旨の募集文を掲載して行った。
- 応募した人全員に、自分のやってみたいコンサートについて「企画提案書」を提出してもらい、それを全員に配布した。
- 基本的に応募者全員にボランティアメンバーになってもらったが、応募はしたけど1回も来なかった人が18人いる。随時受け付けているため、最大時には53名になったこともあるが、その後35名になり、再募集で5名が加入し現在40名。中には、メンバーの口コミで参加した人もいる。
- 募集の条件としては、30歳未満の独身者を対象とした。中には加入後30歳を越えてしまった人もいるが、やめるかどうかは、メンバー自身で決めてほしいと考えている。

● センターの広報紙「エイ・メッセ」創刊号に掲載された募集案内

●ボランティア
コンサートスタッフ

平成7年4月以降、各種コンサート事業や演劇公演、イベントのサポートをしてくれるコンサートスタッフを募集します。

内容は、公演時の舞台裏方・会場整理・タレント接待・企画立案の補助などです。

募集人員は男性15名、女性10名。条件は、いずれも30歳未満の好奇心旺盛で元気な独身者とします。

センターまでハガキで応募するか、直接おいでください。

③ 参加の動機

- 参加の動機はまちまちだが、仕事と家以外に、プライベートな時間をもっと有意義に使いたい、ということが多いようだ。高校生のメンバーは、サポートしているときにホンモノのアーティストが見れるからということを理由にあげていた。
- ボランティアのキャプテンは、学校の先生をやめて現在は印刷関係のデザイナーをやっている人。今のコンサートがアーティストとの距離が遠くなってしまっていると感じ、もっとアーティストと近く感じられるようなコンサート、本当に見たいもの聞きたいものを企画できないかということで、ボランティア活動に取り組んでいる。

④ 研修

- ボランティア導入に際して、民間プロモータの話を聞かせるなどのことを考えたこともあったが、実際には研修は行わなかった。今後は、1年に1回ぐらいは何らかの形で研修を実施する予定である。
- 職員だけで対応できる事業の場合も希望があれば出てきてもらい、ウラに回って見ているだけでも、ボランティアにはいい研修になると考えている。

(2) ボランティアの業務内容

① 業務の内容

- 業務の内容は、大きく①公演のサポートと②企画協力の二つに分けられるが、中には①だけでいいという人もいる。
- 企画関連の業務としては、「アコースティック・トークライブ」が年間11回（毎月第一土曜）、「リレートークライブ」が年1回、「サンホールライブ」が年3回。
- サポート業務については、月平均5～6本で年間80本程度。1回のサポート要員は多くて5名ぐらい。仕事の内容としては、オモテのもぎりや観客対応、楽屋のケータリング、後かたづけなど。最近では、簡単な司会をやってもらうこともある。
- 平均の業務時間は3～4時間程度。1日に映画を3回上映する場合などは、9時から20時までと長時間になることもある。

② 企画協力業務ーアコースティック・トークライブ

- センターでは毎月第一土曜日にアコースティック・トークライブという企画（地元で活躍するプロ・セミプロのアマチュアミュージシャンによる小規模なコンサート）を実施しており、現在は、その企画から実施までほとんどをボランティアが担当するようになってきた。舞台のセッティングから照明・音響機器の操作まで自分たちの手でこなしている。
- アコースティック・トークライブは、地元のアマチュアミュージシャンのコンサート（出演料は1万5千円と夕食）で、企画の枠組みは元々ホール側で設定したものだが、現在は天神のライブハウスを回ったりして、出演者を見つけるところからK's Crewが対応している。福岡はいろいろなアーティストを排出している土地柄で、「照和」という喫茶店が彼らの根城にな

● センターの広報紙「エイ・メッセ(1996.9月号)」に掲載されたK's Crew関係の企画

アコースティックトークライヴ

地元で活躍するプロ・セミプロ・アマチュアによる、アコースティックなライブ！
アットホームな雰囲気のライブハウス感覚でお楽しみください。（出演者募集中！）

SWEETS 9/7(土) AVホール 19:00～ 無料

大学の友人同士で結成したツインボーカルの女性グループ。ギターの井上美知子とヴォーカルの川口和美のパワフルな演奏は必聴！バラードやメッセージソングを中心に、どの曲も心に残るライブとなるだろう。
照和やGRAND TOWNで定期的にライブ実施中。時に福岡駅コンコースにてストリートライブもやる、そのエネルギーをぜひ感じてみよう！
【企画協力】K's-CREW

HOW HAPPY 10/5(土) AVホール 19:00～ 無料

ヴォーカルの島塚美智子、ギターの山野修作、ピアノの島塚秀治のトリオによる初めてのジャズ・ボサノバの登場！
それぞれが色々な音楽活動を経て、HOW HAPPYを1995年に結成。現在「デジャヴ」にて定期的にライブ活動中。
期待度満点のライブになること間違いなし！
【企画協力】K's-CREW

サンホールライヴ

ビリーバンバン

10/1 火 サンホール（全席自由） 開場18:30 開演19:00

永遠の名曲「白いブランコ」でデビューしたビリーバンバン。
「れんげ草」「さよならをするために」「やさしい雨」など、数々のヒット曲をはじめ、新曲も織りまぜながら今も変わらぬソフトなデュエットをお贈りいたします。
淡き青春の1ページをビリーバンバンと共に振り返ってみまんか？
【企画協力】
K's-CREW

前売り 2,500円 【チケット発売中】 当日500円アップ

センター
チケットぴあ
ローソンチケット
FACET

フリーマーケット 出店者募集！

11月2日（土）～4日（月）に実施される春日市文化祭の会場において、「リレートークライヴ'96＆フリーマーケット」を開催予定。そこでフリーマーケットに出店される方を募集いたします。
【日時】11月3日（日）及び4日（月）10時～16時
【場所】春日市ふれあい文化センター周辺（文化祭会場内）
【対象】18歳以上の方(高校生、プロはご遠慮願います)
【条件】1テント4ブース割り(1ブース1.8m×2.7m）で、1ブースあたり500円の出店料必要。
【応募要領】
往復ハガキ又はＦＡＸ（ＦＡＸの方は必ずこちらからＦＡＸ可能な方に限ります）に、①住所②氏名③年齢④連絡先（自宅、勤務先、ＦＡＸ番号）⑤希望日⑥希望ブース数を明記のうえ、センターフリーマーケット係宛ご応募ください。
折り返し説明会開催のご連絡をいたします。なお応募者多数の場合は、説明会において抽選のうえ選考させていただきます。
FAX 092-501-1669【企画協力】K's-CREW

っていた時代もあった。

- 最初、館の方で出演者を探していた時と違い、自分たちで見つけたミュージシャンの場合は、企画だけでなくいろいろな意味で力が入るようで、いきいきと仕事をしている。
- 福岡市内のあるプロモータは、もとは音楽好きがボランティアのような活動から始めて、今では福岡でも有数のプロモータ会社に成長している。K's Crew も現在の活動を地道に続けて、信頼を得られるような集団になっていって欲しい。センターでやっているアコースティック・トークライブの活動を、彼らがアクロス福岡を借りて公演を行つことで、天神付近の若者に、そうした活動をアピールしたいというようなことも、検討しているようだ。
- 10月1日に実施予定のビリーバンバンのコンサートは、K's Crew が企画・制作に本格的に協力した事業で、今後の展開のひとつの試金石と考えている。

(3) ボランティアの運営

① 有償ボランティアの考え方

- 公演のサポート業務については、基本的にはアルバイトということで、時給770円を支給している。ただし、センターからお願いした必要スタッフ数を越えてK's Crewが自主的に協力してくれた分については無償。企画協力業務は交通費を含めて無償。
- 有償ボランティアのあり方については、随分と議論した。当初は、時給400円でK's Crewの会計係が一度プールし、交通費実費と時給200円換算で計算し直した金額を支給していた。しかし、別途サポート要員としてアルバイトを雇う際には、時給800円を支払っており、依頼する業務が同じなのに、時給単価が異なるというのは矛盾しているという話が、センターの経理担当から出てきた。
- そのため内部で検討した結果、現在は時給770円とし、財団の経理から各人に直接支払われたものを一度K's Crewの会計係が回収して、交通費実費と時給400円換算で計算し直した額を支給するようになっている。
- 有償にすることによって、お金が支給されるサポート業務の方だけに偏ってしまうのではないか、という心配もあった。カネを払うと気を使う必要はなくなって使い易くなるが、ボランティアはアルバイトと違って互いの信頼関係が最も重要で、「使われている」という印象を与えてはいけないと思っている。
- 導入当初は、K's Crewにお金を支払っているために、センターの中にはアルバイトと同じように接する者がいたが、現在は彼らが決してカネのためにやっているのではないということが浸透して、いい関係ができつつある。
- 現在は、サポート業務は「アルバイト」、企画協力業務は「ボランティア」と明確に線引きをしている。
- 大型のパッケージ公演を買い取るような場合には、別途アルバイト要員を雇うこともあるが、極めて希なケース。

② ボランティアのスケジュール調整

- K's Crewのメンバーがどの事業を手伝うかということについては、センターの方から必要人数を示し、基本的に手を上げた順に手伝ってもらうようにしている。月2回のミーティングの時にも調整をしているようだ。
- 当初は人員手配がうまくいかない時期もあり、キャプテンが留守電をつけて対応したようなこともあったが、結局再度調整する必要が生じるため、現在はセンターの担当者に連絡してきた順にお願いするようにしている。
- 仕事を持って活動しているという制約から、平日の日中イベントに必要人数が集まらない場合もあり、大学生を勧誘しようという話もある。

③ 運営予算

- K's Crewのサポート業務の費用は、昨年度が120万円、今年度が135万円。

④ 保険

- ボランティアの保険については保険会社と契約している。年間契約で、1

イベント最大15人の範囲内でボランティアの業務中におきた怪我や物損に対応できる保険。春日市は、市民全員がボランティア保険に入っているが、その保険では対応できないということで、保険会社と内容を検討して新たに契約した。

3. 現在の課題と将来の方向性

(1) ボランティア運営上の留意事項

- ボランティアの運営で最も難しいのは、彼らの中に入り込みすぎてはいけないが、離れてしまってもいけないということ。ホール側のボランティア担当者の熱意といったものも重要な要素。
- （現在のボランティア担当者自身も）「少年の船」というボランティアを経験しており、その時に得た感動と同様のものを、センターのボランティア活動をとおして感じてくれる人がいると思う。ボランティアとしてセンターの運営に関わっていい思い出を作って欲しい。

(2) 今後の方向性

- 将来的には、K's Crew の活動が活発になり、そのことによって自主事業がが活性化されるといい。
- 長期的には、K's Crew が事業の実施に際して実行委員会的な取り組みをする場合があってもいいと考えている。チケットの売り上げも K's Crew の収入になり、館はホールを貸しているだけといったようなスタイルになると面白い。
- そのため、来年は規約を持った組織としたい。現在はセンターに K's Crew が付属した状態になっているが、将来的には K's Crew の組織体制を整えることによって、センターの財団とボランティア団体が対等の立場で仕事ができるような形に持っていきたい。そうすることによって財団の担当者に異動があった時にもスムーズに対応できるようになると思う。
- センターの希望としては、このグループはこのグループのまま成長していき、また、これとは違うグループが生まれ、将来的には、複数のボランティアグループが異なる企画を出し、自ら実施していくような形になってくれると理想的。
- 現在のボランティア制度は、財団（運営側）がサポートしてもらうという関係。将来的には、ボランティアが自主事業を実行委員会形式で実施するように成長すれば、その活動を財団がサポートするといったようなスタイルにしていきたい。
- センターが地域に密着した活動を展開していくには、ボランティア活動はひとつの有効な方法だと思う。現在は建物ができてそのことを誇っているような状態。しかし10年後にはソフトしか誇れなくなる。その時、市民が主体となって活発な文化創造活動が展開されているセンターでありたい。

－以上－

■ 春日市ふれあい文化センター

☺ ボランティア・インタビュー記録 ☺

Aさん（ボランティア・キャプテン）
Bさん（会社員）
Cさん（学生）
Dさん（もとOL）
Eさん（もとOL）
Fさん（大学生）
Gさん（会社員）
Hさん（大学研究生）
Iさん（高校生）
Jさん（高校生）
Kさん（会社員）
Lさん（会社員）

1．参加の動機

Aさん｜音楽関係の仕事をしたいと思っていたが、現実にはそれほど窓口はない。春日市にホールができたので、何か関わりを持ちたいと思った。

Bさん｜大学の先輩からの紹介。何か外に向けた仕事をやりたかった。今年、新しく入った。

Cさん｜将来、企画・音響などのイベントスタッフになりたいと思っている。ふれあい文化センターで発行している「エイ・メッセ」の募集記事を見て応募。

Dさん｜雑誌「ふくおか」を見て応募。裏方の仕事に興味があったことと、会社の仕事以外の人的ネットワークが欲しかったことが応募の動機。

Eさん｜ふれあい文化センターから歩いて２分程度のところに住んでいる。この建物を工事途中から毎日目にしていて、この中で何かできることはないかと考えていた。

Fさん｜新しくボランティアを始めた。大学生活では満足する楽しみを見いだせなかった。大学の友人は就職の際にはいずれ競争相手になる。勝負のない世界での知り合いが欲しかった。

Gさん｜とにかく何か手伝えることがあればやりたいと思った。裏方も以前から興味があった。ひとつのことをやる目的で全く違う世界の人達が集まれるのは素晴らしいことだと思う。

Hさん｜１ヶ月前に入った。昨年、文化祭でふれあい文化センターを利用した際にK's Crew の活躍を見て興味を持った。勉強だけに自分の時間を使うのはもったいないと思った。

Iさん｜就職を控え、学校の勉強だけでなく様々な体験をしてみたかった。

Jさん｜ふれあい文化センター内にある「関係者以外立ち入り禁止」の中に入ってみたかった。

Kさん｜もともと忙しく走り回るような仕事、例えばイベント会社のような仕事をしたいと思っていたが、実際には叶えられないでいた。裏方・表方のどちらをやりたいのか、自分で見つけるためにK's Crew に入った。

Lさん｜音響のサークルを持っていた。「エイ・メッセ」の募集記事を見て電話をしたところ、担当者の熱意が伝わってきて、手伝おうと思った。

2．満足度

Aさん｜センターに関しては、我々の活動に柔軟に対応してくれるので大変感謝し

ている。居心地が良いと思う。近隣のホールでのボランティアにも参加したことがあるが、予算がないだけでなく活動に対する制約が多かった。また、職員の意識にも違いがある。ボランティアに対して「施設を使わせてやっている」という意識が見えかくれする。

- K's Crew 内のニュース「Crew's Press」は随分早い時期に個人的なレベルで作り始め、ミーティングに参加できないスタッフに送った。現在も"K's Crew's Press"として継続して発行している。
- アコースティック・トークライブはもともとホール側担当者の企画。昨年４月に K's Crew で担当してみないかと言われ、２～３人で天神のライブハウスに足を運ぶようになった。出演するアーティスト側はセンターの職員ではない我々が出演依頼をしてもまずは快く引き受けてくれる。おそらくステージさえあればどこでも、という感じなのかもしれない。
- アコースティック・トークライブの観客層は、出演バンドの個人的なファンかセンターに来ていて偶然公演を知った人。春日市という場所は、福岡から春日駅までなら出かけるのも困難ではないが、春日駅からセンターまでの交通の便が悪すぎる。

Ｂさん｜最初はモギリ程度の仕事しかしていなかったので、アコースティック・トークライブが始まって随分と中身が濃くなり楽しくなった。大学でバンドをやっていたので、ＰＡにも興味があり裏方にはなつかしさも覚える。

Ｃさん｜去年はなかなかサポートに参加できず、また仕事の内容にも満足できないでいたので、実は自然消滅しようと考えていた。（イベント企画、照明の操作、衣装の制作などをすると思って参加したが、当初はチケットのモギリ、ケータリングの補助などお手伝い的な要素が強かった。）今年になって来てみると K's Crew のメンバーが以前よりもイキイキと活動するようになっていて可能性が高まっているのを感じた。今は満足している。

＊「エイ・メッセ」にある募集記事のうち、裏方に興味を持って応募した人４名、会場整理０名、タレントへの対応２名、企画に興味を持った人６名。実際のサポートは会場整理を中心に始まった。

Ｄさん｜ネットワークをつくる、という点では恐らく 100%満足している。福岡市内から電車で通うことをおっくうに感じることも当初はあったが、 K's Crew の誰かが個人的に連絡をくれるなど繋がりが完全に絶たれることがなかった。仕事ではアコースティック・トークライブの担当者になっている今が一番楽しい。福岡市内のライブハウスに行ってアマチュアのバンドを捜すなどこれまでにない楽しみを見いだせている。

Ｅさん｜もともとハコ（建物）に対する興味から入ったので、仕事に対する不満はない。ホール側担当者の話を聞いているとガンバロウと思えてくる。サポート以外でもボランティア内の行事（レクリエーション部に入っている）を企画するなど、生活に密着している。

- 企画をするためにはモギリの仕事も決して無駄だとは思わない。会計を担当しているが、報酬やその支払い方法（一旦施設側からスタッフ個人に支払われたものを会計に渡し、交通費実費の額に応じて再配分する）についても特に不満はない。

＊春日市内在住者が 50%。それ以外の地域からは１時間程度かかる。最も遠い人で

片道２時間はかかる。

＊サポートは希望制。ミーティングの際に活動可能な日程を挙手で決める。足りない場合にはセンター職員で対応。

Ｆさん｜新しいところでの人との出会いについては満足している。仕事の内容に関しては、舞台裏の仕事もよくわからないし、それを本当にやりたいかどうかもよくわからない。現在のモギリで満足している。

Ｇさん｜人を求めて来たという面では、同じ目的を持って集まれ満足している。センターの職員の方々にも親近感を感じる。舞台裏も積極的に見たい。ここでやれることの可能性を感じる。交通費も支払ってもらえるだけで有り難い。ボランティアというよりもむしろ、市民活動団体あるいはサークルといったイメージ。趣味の延長上にある。

Ｈさん｜ミーティングには出てきているが、実際のサポートは未だしていない。

Ｉさん｜面白いと思う時と、そうでない時がある。土曜シアターに継続的に関わるようになってから、大人と同じように「いらっしゃいませ」などの言葉を使えるようになった。

Ｊさん｜当初思っていたものと少し違うような気もするが、実際自分で何がやりたいのかわからない部分もある。高校生なので平日のイベントには入りにくいが、祭日の方がイベントは多いので特に問題は感じない。

Ｋさん｜仕事を持っているため時間に限界があり、イベントでももう少し奥深いところまで関わりたいと思うが現実には対応できないでいる。K's Crew のミーティングには多くて月１回。実際のイベントには多くて月に２回程度の参加頻度となっている。

Ｌさん｜異業種や年代の違う人との交流ができるようになった点は満足している。また楽屋でタレント等のふるまいや人柄に直接触れることができた点も良かった。

- アコースティック・トークライブについて、ＰＲとしては、チラシを作成してセンター内や春日駅に置いてもらっている。地元のＦＭでも情報を流してもらう。会場のＡＶホール（50名のキャパ。立席で70～80名）は丁度良い大きさ。当初１年間は300人のホールを使用していたため客席がうまらなかった。相応の会場に移り、ミュージシャンとも近くなり、観客の反応も良くなった。

３．施設側への要望・課題等

Ａさん｜個人的には、アコースティック・トークライブについて、今のステージではアーティストと観客の間に距離がありすぎると思う。本当に感動するステージを 600 人のホールで実現してみたい。

- もうひとつは、ボランティア活動自体について。日本のボランティアは関西大震災以来興味関心は高まっているものの、まだまだ後進国。ボランティアに対する偏見もある。それを変えるための受け皿を自分たちが K'Crew でつくりたい。

Ｂさん｜音響をもう少し勉強したい。センター側で音響機材など技術的な面での研修や企画に関する研修などを開催してくれるととても役に立つと思う。

Cさん｜スプリングホールを使ってアコースティック・トークライブでやっているような企画をやりたい。

Dさん｜ K'Crewで対応できることに関して研修を受け、もっと勉強してみたい。

- また、立地条件が悪いので、それでも人が来るような企画をして欲しい。これまでのセンター側とのやりとりの経験からは、こちらからの要望に対しては、随分柔軟に受け入れていただいていると思う。

Eさん｜ひとつの企画を最初から最後までやりたい。あと、継続してやっている土曜シアターについては、映画上映の前にアナウンスを入れるなど、関連した企画を考えてみたい（現在の業務は、当日券の販売、モギリ）。そのためには、上映作品を事前に見ることができたりすると良いと思う。

Fさん｜センターの職員の方々はとても快く対応してくれていると思うので、特に要望はない。センターの運営に関しては、館内放送がないので、放送で公演やイベントの情報を流すようなことがあっても良いのではないかと思う。

Gさん｜ある程度の規模のコンサートを1から10まで、つまり企画から始め観客の満足度を感じるところまでやってみたい。音響や舞台に関する研修などが可能なのであれば、是非やってほしい。

Hさん｜ K'sCrewを始めて日が浅いので特に要望はない。周囲の人達のレベルに早く達したい。

Iさん｜あまり観客が入らないようなアーティストを呼んで、会場をいっぱいにしてみたい。

Jさん｜ K'sCrewをやめても、ここでの経験が生かせるような活動がしたい。

Kさん｜有名なアーティストを呼んでコンサートをやりたい。春日市ではいわゆるオバチャンにパワーがある。彼女たちの層をターゲットにし、観客がいっぱいになるようなコンサートをやってみたい。

- 交通の便が悪いので友人を誘いにくいと思うこともある。特に最終バスの時間が早いので、アンコールが長くなるとバスに乗り遅れるため、バスの時間を気にして拍手をするようなことになる。コンサートの送迎バスがあれば良いと思う。

Lさん｜我々のより幅広い活動のために、教えて欲しいと思うことはたくさんある。

- 職員の人もボランティア活動を体験してみたら良いと思う。センターでの仕事に関わりたいという純粋な気持ちからここに来ているが、それが精神的・体力的に大変なこともあるので、それを理解して欲しい。
- K's Crew をやっていることで仕事をおろそかにしていると言われたくないので、通常以上の努力を職場でもしていると思う。 K's Crewをやって強くなったと言われたい。

－以上－